

大根の葉ツバにつく害虫の一つをつかまへてきてもその取扱方に依つては立派な昆蟲學が學ばれない道理がない。

自家に飼つてゐる馬とか牛とか鶏とか豚とかを日常精細に観察して行くことに依つて、或は本なんか書いてない前人未發の不思議な習性や心理作用などを發見して學者達を驚かし得るかも知れぬ。

土壤や肥料のことは純然たる化學の領域に屬することであるし、農具は直接に物理學の原理を指示し、尤も關心な氣象の變化は不斷に天文學の面白い現象を呈示してゐるものではないか。

米價の變動、農業倉庫、産業組合などの研究は經濟學や社會學の必要な部分を教へるし役場とか村會とか選舉とかいふものを徹底的に研究して行くことに依つて政治學が充分に學ばれるといふもの。否、學ばれるどころぢやない、役場のこと村會のことがしつかりと村民に呑み込まない中は、自治の單位が完全に働けない中はどうなにしたつて一國の改善が出来るもんぢやない。代議政治の腐敗は實に村會の腐敗にまがふべくもない端緒を發してゐるではないか。

斯く田舎人がその日常直接に關係してゐる箇々の問題を引擱へて、それを臨床的に研究すること

が尤も有意義であり、尤も有効な行き方である。それらの一つひとつを研究することに依つて、大學教授が教壇に立つて概念的に講義するのより以上の實質あるそして即坐に役に立てるほんとうの智慧を得ることができる。

物事は凡て直接的に學ぶのが一番キビくしていい。吾々は得て日常手近な事物を精確に受容れることを等閑に附して、遠く隔つた地方のことを只概念的に學んで得意がつてゐるクセがある。どんなに日常の些事と雖も、その取扱方に依つて立派な哲學ともなれば藝術ともなれる。そうした發見は吾々の獨創によるものだから殊更尊い。

「或夕、市民の爲に開かれた、

大學教授の天文學の講義を聞いた。

物の三十分とたゞぬまに、

たまらなく睡氣を催してきて、

私はそつと席を外し、

たつた一人でじつと星空を眺めた。」

ホイットマン

198

吾々は星空の神秘に促されて、たまに天文学の本を図書館などで覗く、が三ページも繰らぬ中に、とても義理にも續け難くなる。それが物識りの學者くさいものであればあるほど。

吾々は荒野の草花にたまらなくひきつけられる。そして先づ名前を知りたく思ふ。その爲に植物の本を翻けば、長つたらしいラテン名。分類綱目。どこに自分の探す花があるんだが、ちよつとやそつとで探し當てられない憾み。その中に興味も何も水をさゝられて了ふ。

植物學者は吾々一かどを學者にしてくれるつもりで本を書いてゐるんだらうか？

學校で物を教へるやり方はみんなこうした學者の書き方とかはりが無い。みんな一かどの學者にするつもりでしか教へない。けれ共學者でなくたつて、植物學なり天文学なり味へる方ははいくちもあるだらうに。

小學、中學時代の生徒に取つては、屋根の下なる教室よりも、大空の下なる野原の方がどれ程いゝ教室であるか分らない。本なんかよりも「生きたものを生きた目で學ぶ」といふのがほん

うの仕方だ。そういふ意味から田舎の方が都會よりもよりよき教育の舞臺だことは元より言ふ迄もない。凡て拵へもので第二義第三義的仲介に依つて教育されることは、ちか自然物と接觸して學ばせることに比ぶべくもない。處が田舎に居る多くの先生方はさつぱりそうした優越點を自覺せず、都會のマネを逆輸入して、あれも足りない、これも不完全だ、ペビヤノがどうの理科器械がどうのと、そんなことよりも却つて自分達自身が大事の素質、物を観、物を考へる素質に於て缺くるところあるのに氣がつかないでゐる。

子供は一種の動物だ。彼は先天的に大自然を戀ふ。ちかに動物や植物や土壤と接觸したがる。それが籠の鳥のやうに四方壁の中に入れて四角な小さい机をあてがはれて、出來合ひの版畫などで胸を覺えさせられてゐる。可愛相なもんぢや。なぜ川の涯り、山の上、野の中、大空の下で物が覺えられないのだらう。

天女の羽衣の裾でもちぎつたやうなシェードを置電燈にかけ、マホガニイのガツシリした大テーブルでも無茶付けた書齋でないと本が讀めない人がある。

198

ウオーズウオーリスの湖畔の家を訪れた客が、何か探すやうな目付をして訊いた。「御主人の御書齋はどこですか？」

「ハア、兄の書齋は戶外です」と妹は無難作に答へた。

「書齋の中で俺はたゞ、

オシ、ツンボ、アホウ鳥、

産れざるもの、死んだもの、」

ホイットマン

「私の思想は、大道を徒歩するものが、行きずりに、摘まみ食ふ道傍の野苺のやうなものだ。食堂のテーブルでそれがあまりに酸っぱすぎるたつて誰が知るもんか。」

ト　ロ　ウ

「おぢさん、これナアに？」

両手に一杯の草をつんで、にこ／＼見上ぐる一人の幼児、

何んと答へたもんだらう？ 俺はこの幼児よりも

ちつとも知つちやわねいんだもの。

だがなア、それア俺の氣持をあらはす旗幟ぢやないかい、——希望に満ちた鮮緑の糸で織つた

それとも——

持主の名前をどつかの隅に刺繍つて、

ア、あの人のかとすぐ分らせるやうに、

うつり香もなつかしく、わざと落してよこした、

造物主のハンカチーフかね。

それとも、一揃ひの象形文字かね、

廣い野ツ原にも、狭い隅ツコにも生える、

白人の中にも黒人の中にも成育する、

カナカ(布哇土人)にもタツカホウ(北米土人)にも、代議士にもカツフにも、

俺は同じものを與へ、同じものを受け取る。

ホイットマン

七月の暑い日盛りに、オークランドのレーキサイド(湖に沿ふた公園)を散歩してた私は、ふと気がついて側にある博物館に入つた。例に依つてインデヤン(土人)の遺物や文化の歴史的陳列などのある中を殆ど素通り同様に黙過した私は、端の方の細長い室とそれにつづく廊下に、澤山の草花が盆栽のやうに並べられてゐるを見た。それは何らの珍奇な種類ぢやない、ホンのそこらの道傍に咲いてゐる、そのくせ大抵の人に名も知られぬ野生の草花に過ぎなかつた。それらはこゝろして一つ／＼陳列されると確かに言ひ知れぬ見どころのあるものではあるが、それよりもその名前を一々丁寧に貼布してゐるのを読んで行くと、何とも言へず満足の微笑が自らに唇邊に漂ふ

のであつた。我々が無關心に見過してゐたのは、必しも美はしくないからぢやない、その名前もその形態も立入つては知らぬ無自覺無教養から來てるのだつた。吾々が子供を連れて散歩する時子供のあの熱心な質問に對して、只知らないと答ふる外ない本意なさ。恰もそんな雑草の名前なんかどうでもいゝと言つたやうに。そしてそうした冷淡さがいかに子供達の注意深い觀察を反らしてゐることだらう。吾々はこゝでも吾々の受けた基本教育の誠に不完全極るものであつたことを痛恨せず居られぬのである。

吾々は今急に必要に迫られて、植物圖鑑など見たところがちつとも面白くない。ありふれた雜の目にも觸れ易い雜草からおもしろく植物學に入れるやうに本が書けないものかね。そうした本を讀いてもそれに依つて直ちに吾々の教育者としての資格を完成することはできぬだらうが、しかしおもしろくもおかしくもない學術書と銘打つたものよりはまだいゝ。勿論野外的なものはやはりそのある場所野外に於て研究するのが一番だ。が博物館のやうなところにそうした方面の智識を實際的に、そして知らず／＼市民に與ふる用意は、誠に有益な機宜に適した施設の一つだと思ふ。これらは博物館が圖書館と共に市民公衆の爲に、充分金をかけていゝ理由の一ヶ條になり得

る。

文部省では近頃やうく農村と都會の教科書を別々に拵へなければならぬなど騒いでるが、吾々はもう廿年も前からそれを喝破してゐた。教科書なんか入らないことになれば、黙つてゐても田舎は田舎らしい教育にいつしかなつてゆく——ルーライズして行くにきまつてるんだから別々の教科書を作る必要なんか無いのだに。しかし遅時乍らそこに気がついたのはいい。

本來農村と都會とのケジメは必然にその教養カウチユアに現はれなければならぬ。從而農村の教育と都會の教育とは決して劃一的に爲さるべきものではない。農村と都會とはその環境が違ふ。その職業が違ふ。その生活ぶりが違ふ。そのみならず、田舎の子供は獨逸人のいはゆるジツツフライツシュ——ジツと坐つてゐられるやうな筋肉を持ち合はせない。従つて教室になんかおとなしく据えられてゐることに堪へない。からだがムヅ／＼して来る。大空の下に出て動植物と交際ツキあひしたくてたまらない。雨や泥を物ともしない。野天の方が彼等にふさはしい教室なんだ。

そしてそのやることも抽象的なものよりも具體的なもの、人工的なものよりも自然的なもの、方に興味を持つ。中學あたりでやつてる博物學の智識は充分田舎の小學校でやつていゝんだ。大

低のものは目に親炙してゐるんだからくどくどしい説明しなくとも分る。こうして早くから自然科學に目を開かして置くことは、田舎を理解し、それに愛着させる上にもいゝことだ。そしてそれをやるのに小學校に於ける農業科の擴充といふことが持つて來いの役に立つ。

田舎の小學校は大多數の田舎人に取つて前後只一つの學問所である。されば彼等は此處スライでボール、即ち読み、書き、ソロバンを兎に角役に立てる丈ミツシリ習ふことが一番目指すところだのみならず、もつともつと農業といふものに就いて學ばせなければならぬ。田舎の小學校の大黒柱として農業といふものを打つ建てなければならぬ。

農業といふものは、殆どあらゆる自然科學と直接連絡のある學問だから、それを主體にしていゝろく／＼な科學に通じしむることができる。入學試験の稽古見たいな教へ方が必要なくなれば、まだ／＼能率的に科學教育を與へうる充分の時間があるのだ。そしてそうした科學的の手ほどきが與へられたら、田舎に生れ田舎に死ぬものでも、一生の中には自學自習で何かしら發明發見も可能になり、學校の産物よりもつと夙く役に立てる産物が、自然生ゼネシヨウに出來ること請合だ。

### この道は開闢以來の道だ

自學自習は、人間が自分を教育するほんとうの道なんだが、それをそういふ風に慣らさないやうに、抑も小學校のやり方からそれを打ち壊はしてゐる。そこを吾々は反省して見なければいけない。小學校の存在はそれ自身一つの完全な職能を持つてゐるのに、中等學校を頭に置いた準備教育に墮して了つた。だから自分が自分を教育せるやうに養成されるのでなしに、どうしても中學校に行かねばならぬやうに許り仕立上げられる。中學校なんか眼中に置かないでも、小學校がそれ丈で役に立てるやうに、それ自身獨立して立つて行かなければウソだ。尠くとも自らが自らを教育し得る土臺、下地を作つてやらなかつたらウソだ。

小學校が中學校になんか隸屬したら堪つたもんぢやない。中學校や大學校こそ小學校に隸屬すべきものだ。恰も補習學校が小學校に隸屬するやうに。これは決して反語ぢやない、正氣の正言だ。

或る校長が私に述べた。

「小學校の小の字を取つたら、どんなに凡てがよくなれるだらう」と。

ほんとうにそうだ。小の字がついてゐるばかりに、一から十まで卑下と輕視と、弱小と低級とが附き纏ふ。何か外の名前、國民學校とか人間學校とか言つたらどうか。(そうすれば又國民高等學校、人間大學などいふ名前も出來やうか)

吾々は千百の有名な大學教授よりも、一人でいゝからほんとうの小學校長を持ちたい願が切だ。文部大臣なんかその前に出たらひとりで頭の下るやうな人を小學校長にして見たい。それを捜し出すにはほんとうに鐵の章鞋を穿いても足りない程に思ふ。

それなのに奏任官位を關の山にして置くのだから、人間がどうしてもチツボケになつちまう。位や月給に頭から制限をつけて置くものだからどんなにしたつて圖ぬけた人物の出やう筈がない。生きた人間を作る仕事にたづさはるものが、どうして土木の技師よりも安い給料にあらねばならぬのだらう。このことはほんとうに解すべからざることだ。

丁株の國民高等學校のよく行つてゐるのは、教科でも訓練でもない、校長に許されてゐる自由と。

權威と生活の落着にある。視學だの文部省などから何等の壓迫も干渉も來らざる點にある。丁抹に學ぶなら何よりも先づこゝに着目しなきやならぬ。

成城では小學校で足りなくつて高等學校を設けた。今度は大學も必要になつてくるであらう。それが出來れば結構だ。だが、そうする爲にどんなに多くの經營の上の困難と煩勞とが増すことだらう。そして文部省だの學者だの金持ちなど、折衝しなければならぬ必要がどんなに殖へることだらう。そうした類ひのものにかゝづらつてゐると、ほんとうの教育が出來ない爲に、新しく出發した筈ぢやなかつたのか知ら？

いゝ學校は小學校丈でいゝ。小學校丈でいゝことになればどんなにもよくやれるんだ。だから小學校丈でいゝときめてゐる人達丈で小學校がやつてゆかれぬものかしら？

小學校を卒業してそれからはいゝ學校を、他所に、そしてそれを眼中に置いてゐては、とてもくほんとうのいゝ小學校は出來ツこない。アルファにしてオメガなる學校——としての小學校

を打建てる人はないか。

田舎の小學校は、どうしてもこうしたアルファにしてオメガなる學校でなければならぬ。それは一生に一度しかくゞらぬ學校であるんだから。補習學校だの、青年訓練所など別々の看板をかける迄もない、それらの凡てを包含してゐるやうな充實した渾然たる一つの完備インスチテューション關でなければならぬ。そしてその校長は村長と同じく村民が招聘し選任しいつ迄でも留保し得るものでなければならぬ。昔の村夫子こそ今の時にも必要な人物だ。よくあちこちの田舎に「何某先生之碑」と刻し下に門人の名前を列記した素朴な自然石を見るが、あれを見る毎に、私は昔の教育の切實な徳澤を偲ばずに居られない。あういふ人達は村人と同じやうに山澤に埋れてゐ乍ら、却つて長い流風餘韻を残してゐる。今の教育家はそれとは違ふ。餘韻や徳澤はどうでもいゝ。何よりも自分自身が立身しなければならぬと焦せつてゐる。大へんな違ひだね。

田舎の小學校が最始にして最終なる教育機關である職能にシツカリと立たない缺陷が恐ろしい

損害を田舎に與へてゐる。即ち年々歳々嵩み行く教育費が、村々の財政を破綻に瀕せしめつゝあるやうに、子弟の教育費が百姓のカマドを破産に瀕せしめつゝある。中産階級——「中農の没落は主として學校に入れた瘦我慢の酬み」であることは最早否むことの出来ない歴史的事實だ。

中農は確かに健全であつた。それ故に一番先に彼等は教育に目覺めた。その上彼等には兎も角も多少の餘裕があつた。彼等は争ふて新しく出來つゝある中學校、女學校、農學校にその子弟を入れた。ところがそれらの學校は彼等の所期したやうな人間としての一人前の教育を與ふるところではなかつた。それは初めから月給取りを養成する外の何ものでもなかつた。それだからそれ丈で止さすとアブハチ取らずの何にもならない許りぢやない、あべこべに子弟の不平不満を買ふ許りだつた。尙もそれ以上の高等教育を受けさせやうとすれば、破産を覺悟しなきやならぬのだつた。ロクな月給取りにもなれぬ者を養成する爲に、彼等はその乏しい懐から月給を取られた。月々の入費は嵩んだ。それが疊つて借金となつた。借金がとゞ田地を奪ひ去つた。これが紛れもない中農から小作人への徑路であつた。

彼等が多大の犠牲を拂つて通はした學校の教育は、眞個に彼等の地位を改善すべく役立たな

つた。それは「生産人としての教育」ではなかつた。それは彼等の家業の改善に直接役立たなかつた。彼等の家の柱は新しく置き換へられなかつた。或者は好運と好縁により、彼等の元の地位とは遙かに懸絶したる地位に成上つたものもあらう。けれ共それが何んだ。よしんば百姓の子が農林大臣となり勸銀總裁となつた所がそれが爲に農民階級が救はれた例しは更でない。それがそうした地位になり上つたのは、本來百姓たるが爲に非ずして、實に百姓に非るが爲なのだから。げに百姓が純眞に百姓の心持を把持してたら、一生末代、大臣はおるか村長にだつてなれつこないのだ。

斯くて喘ぎ／＼中等教育丈でも卒へさしてやつたに拘らず、あべこべに何かしら滿されざる不平を抱かしめ、その上彼等の固有の地位よりも遙かに自由に非ず、獨立にも非る安月給取りに低徊するの餘儀なきに至らしめる。よしんば本來の家業に立歸るにしろ、何時に初まつて何時に終はるとか、日曜祭日、夏季冬季の休暇などから来る悪い習慣は、恰も禁斷の果物を嚙つたアダムの如く、最早昔日の如く通し勤勞と風餐沐雨とに堪へざらしむる。こうしてよしんば農學校に入つたにしろ、その子弟は到底純粹の農夫に立歸る能はない。學校教育は斯くしてその本來の家訓的



目的に取つて全然アライン(異邦人)な子弟を作り上げて了ふのである。

ドブ鼠はドブを好き、穀倉の鼠は穀粒を好く。けれ共鼠そのものには高下はない。穀倉の鼠はドブ鼠を笑ふであらう。けれ共穀倉が空になつた時はドブ鼠だつて穀倉の鼠を笑ひ得る。學校教育は小中大を通じて悉く月給取養成を目的とする教育だから、一度學校へ入つたが最後月給取り許りがえらいやうに見える。官尊民卑にも唯物的の根據がある。

のみならず田舎人としての唯一資格たる農業上の修練は決して學校教育に依つて與へらるゝものではない。外の工業とか商業とかいふものなら知らず、農業を本に依つて學ぼうとすることはそれ自身本學問に過ぎざる學校に於て學ぶと同様極めて無效果なやり方だ。農業文は誰が何といはうが決して本などに依つては學ばれるものではない。それは「墨の上で水泳」が學ばれないと同一轍である。

本は、何と言つても書いた人の産物でしかない。本が書けるやうな人に、ほんとうの農産物ができやうわけではない。

のみならず、實際の生産業には本に書けない點が澤山にある。生産者としてのコツとかウデと

かいふものは到底筆で現はされるものではない。このことにハッキリ目が覺めないとほんとうに飛んでもない目に逢はされる。大工が大工の弟子として修業するやうに、百姓も亦百姓家に於て修業するのが一番いゝ。ドイツではよしんば農學者として立たんと志す者でも普通學を了へると二年間同一の農場に於て實際の修業を爲すことを要求される。農業は何一つ生産するにも一年や半年はかゝる。それは季節と共に進む継続的な努力を要するので決して一學期だの二學期だのといふ人工的時間割に依つて、季節なんかに関係ない講義に依つて學ばれる筈がない。それは頭を本に突込むことでなくして、手を泥に突つ込むことである。それは答案を紙に書くことに非して、米なり大根なりを土に産らすことである。人が口や筆で言ふことではなくして、土をして語らしむることである。

私の縣の農事試験場に農業教員養成所といふ看板がかけられてある。それは主として農學校卒業生がこゝで一年間寄宿して技師達の講義を聞き、試験場の一部に與へられた試作地に實習をすることによつて、村々へかへつて技術員兼補習學校教師といふ資格を得られるのださうだ。

此の中へ農學校出身者でないものも二三人はいつてくる。小學校卒業後自家です——と百姓をして來たのが、どうしても學びたい念をすてられず、あかすまに本を讀んだり講習を聞いたりして、ために農業科の檢定試験を受けたら、もとくよかつた頭のきよめが直ちに現はれて首尾能く合格して、村の小學校に教鞭を取るやうになつたのであるが、縣で新たに教員養成所なるものを開いたので、何かにつけ師範出や農校出の學校をかさに着る同僚の自惚にいゝ氣がしなかつたので、自分達の資格に多少の磨きをかけやうといふ氣で入つて來たものらしい。

所がこゝに面白い現象が生じた、といふのは、農校出の連中は、講義を聞いても別に立ち入つた質問をするでもなく、漫然と課業を送り迎へてゐるのに、かの百姓生活を地道に歩いてきた連中は、技師先生を擱へて、抜きさしならぬ質問をする。理論と實際との距離をぐんぐ近づけやうとして焦りもがく。ところが技師達は本に依つてノートを作つて講義文してれば能事了れり得心得てるので、そうした質問には即坐に返答が出來ず、毎々理論は理論、實際は實際と、チャンと棚を二つに分けて済まして置くので、百姓上りの生徒達は頗るあきたらなく感じてゐる模様である。

殊に顯著なるは農校出身者と百姓上りとの實習に對する心持の違ひである。農校出の連中は兎角に實習を逃げやうとするが、百姓上り達はそれをマターオブコース——當り前のこととして少しもおもやみがないやうである。これらの違ひは誠に輕々に看過することの出來ない階前千里の差を胎むものではなからうか。實際の百姓達に農校での講義の蒸し返しを講義したところがどうなるもんだらう。幼稚園の花壇見たいな、試験田なんかの作業にさへ倦厭の色あるに至つては呆れて物が言へぬ。もしこれらの修業生が學校に於て只講義さへしてればいゝといふならば、それでもよからうが、村の技術員といふ肩書を頂戴して、實地に百姓達を指導しなければならぬ使命を持つてゐるではないか。何十年來技師達のお書物學問にすつかり幻滅を感じてゐる百姓達は、そして實効の坪量には極めて敏感な百姓達は、もはや講義などに些の權威をも認めなくなつて來てゐる。普通の百姓より以上の收穫を上げて見せるのでなかつたら、もはや技師だらうが技術員だらうが少しも徳としなくなつて來てゐる。そこへ持つて行つてこうした修業しか持たない先生方をやつて、又しても役場に月給取をふやさしてゐる。結局税金がかさむにすぎない。百姓達は役人の講義よりもよき肥料でも配附して貰ひたがつてゐるのに。

實習は百姓家でやるべきものだ。學校や試驗場などのいはゆる試作地に於てすべきものではない、やるなら本氣に、徹底的に、收支計算を眼中に置いて、實際の百姓達と伍してやるべきだ。チヨコ／＼した眞似事でやらすべきものぢやない。

又試驗場あたりでやられることは、實際の農家に持つて行かれるやうな何一つ役に立ちそうな實習はない。實習は何といつても百姓達と伍してやるべきものだ。

學校では實習などやらす、純粹に科學の検討に従事する丈でいゝ。こうして實習と學理とを生半可にごつちやにしないで各々そのやるべき最好の場所に於て充分徹底的にやるべきだ。然るに斯國では、理論にも實際にも、徹底的の鍛練を経ないものだから、實際としては百姓に劣り學問としては科學者の域にも入らざる技師だの技手など詐り拵へて、それをして實際の農夫を指導させやうといふんだから空恐ろしい話だ。それらの人々は單に百姓達の入らなかつた學校といふものに入つたといふこと位の外に、何の百姓達の師たる取柄があらうか。此事は少し良心の鋭敏なものには大低自覺され得る筈だ。生産組合とか消費組合とかいふやうな事務に學校上りを採用す

るのはまだいゝが、田圃に迄技師技手達をやつて指導させやうとする無鐵砲と身の程知らずには呆れる外ない。百姓達はオインレと指導の通りやらないからいゝやうなものゝ、やつた日にやどんな結果に陥るか豫測さへ出来ない。

既に經濟上から學校といふものを思ひ切らねばならぬ上に、農業といふ職業的修業が學校に於ては全然木に縁つて魚を求むる類ひだといふことが明らかになつた以上、吾々百姓は何を苦しんで學校に無駄養錢を率納する必要がある。こうした學校教育のネウチがハツキリ分らないでは百姓はいつ迄経つても頭の上る時がない。「百姓達の卑屈」はあらゆる意味に於て彼等の自主的向上心を阻み、アキラメ主義も、官尊民卑思想も、悉くこの卑屈根性の現はれだが、抑もこの卑屈根性は何から出發してゐるか？

それは、單に自分達に學問がないといふこと、それをもう一つ詮じつめれば、單に學校に入らなかつたといふこと。而り只親の罵を喰つて學校ちうものに長い放浪をつゞけなかつたといふその自意識にしか過ぎない。

師範學校を筆禍の爲に追はれて、「大學へ入る」と呼號して東京へやつてきた甥に向つて江渡さんは言ふたものだ。

「フム、大學といふものがどんなに愚劣なものだかといふことを知る爲には、入つて見るもよからう」

學問がないといふ卑下はまだ聞えてゐる。たゞ學校に入らなかつた、大學ちうものに入らなかつた爲の卑下に至つては何等意味を爲さぬ。大學といふものゝ内かぶとを見透うしたものに取つては即坐に幻滅すべきものなんだが、どうも學士に非るばかりに、一生天井がつかへてゐる下役人共のグチが日本國中どの隅にも充ち満ちてゐるから困る。只近頃都會労働者の間からそれに拮抗する氣風が稍頭を擡げて來てるやうだが、それすら反抗の爲の反抗で、ほんとうに彼等學校出身者の沽券に對する幻滅とまでは行かぬやうだ。それでも百姓達のそういふ方面では丸つきり脅かされ通しでゐるのよりはまだくみました。それ丈でも彼等労働者の運動にはより多く活潑なところが有り得る。

學問なんか怖けちやいけない。それはそれ丈では何等の力もないものだ。その證據には近頃

何々博士の肩書で出る農村問題に関する本を一冊試みに翻け。その何處に實際の解決に役立つ方策の一ツでもあるかを。現實の開拓は誰が何と言つても當事者自身が止むに止まれぬ必要に迫られて「行動」を以て解決し行く外に道がないにきまつゐる。學問なんかの有無で人間の高下強弱が分れてたまるものか。敵が理論で來たら、こちらは全身で打つかつてゆけ！

「行こう！ 引止めらるゝな、

いゝから、紙は書きかけたまま机上におけ、本は読みさしたまま棚の上に祭り込め、道具は仕事場にほつとけ、錢は儲けずとまゝよ、

學校は雨晒らし、先生の聲にも耳をかすな、

坊主をして勝手に説教をさせ、法官をして勝手に法をいちくらしして置け。

いとしき吾子よ、サア俺の手を握れ、

俺は錢よりも尊い愛を呉れてやる、

俺は説教だの法律だの、代りに俺自身を丸ゴト呉れてやる、お前もお前自身を呉れるか？ 俺と一緒に旅するか？ 俺達は生きてゐる間、いつまでもくつついてゐやうなア、」

ホイットマン

逆境にちつと堪えること、つまらない仕事にもコツコツ根氣よく働くこと、仕事にも造る物にも充分仕上げを良くするといふこと。人を使ふよりも自分の勞苦を厭はぬといふへり下つた氣持弱きものに無條件に同情しうる俠氣。責任に殉ずる犠牲的精神、これらの人としての強いところは、どうしても學校なんかにはぶら／＼せずには、夙から獨立自活した經驗から出てくる。智識的修養に傾く學校に於て、人間は却つて「弱くされる傾」がある。意識しつゝやることは兎角弱いものだ。無意識に、トーツと人の難に赴く氣質が實に強いものだ。平勞働者などに見るアノ義理固い氣骨のある點が、智識階級などに見られない氣持のいゝところである。ゴツゴツしたゴリツと引締つた氣質は、夙から獨學實行に鍛えられて來た人達に多い。學校ではそういう方面のこと

には餘り頓着もしなければ推重もしない。それだから人間としての骨節こせつのきたへ方に手ぬかりが多い。仕末に了へない智能犯が頻出する。不良少年は街頭からよりも學校からの方が多し。學校から圓轉滑脱の才子はいくらも出るが、社會的正義を樹立する闘士は仲々出ない所以だ。

「君の教育論の最大缺陷は、そんならどうすればいゝか？ といふその對策がないことだ」と或る人から言はれた。私はそう許りは思へない。私の議論は必しも批評許りだつたとは思へない。私は批評のかけに充分對策を含蓄してゐたつもりだ。私は對策を胎む素地として批評の地均らしをやつた積りだ。則ち私は私丈に握つてゐるプリンシプルを把持して批評を爲した積りだ。

勿論教育家として全然素人に過ぎない私は、具體的な一々の方案を提示し得ざるを遺憾とする。けれ共プリンシプルさへきまれば、具體的の對策は、その時、その處に従つて自ら案出せらるゝであらう。それが案出せられる迄の執着と熱意とが無かつたら、百千萬言を費したところが遂に何するものぞ。

私の尤も怖るゝのは、對策を求めて技巧に墮することである。

方法といひ、技術といふ、それらは産れたる教育家が自分自身で發見し工夫すべきもので、人から強いられたり、勿論人の眞似をすることぢやない。先生達各自の胎から産れて來なくてはならぬものだ。本來は技巧でなくしてタマシヒが人を動かすものなんだ。なんぼなんでも人間は、造らるゝもの工藝品とは違ふ。工藝品でさへほんとうに後代まで残るほどの作品は、作る人にタマシヒがなければならぬ。技巧は得てタマシヒをごま化す。書畫などのニセ物は技巧としては申分ないものだらうが到底ほんものであり得ない。

技巧は模倣され易い。教育上の技巧も御多分に漏れぬ。いはゆる新しがりやの、輸入式の技巧は、時、處、位の見さかへなしにおいてそれと模倣され易い。そしてむやみに道具立が入る。設備が入る。とゞ金が要る。結局金持階級しかそれに浴し得ないことになる。

それもいゝ。さらでだに有産と無産と一緒たにして置くと、無産が有産にかぶれ、身の程を知らぬ贅澤をいつとはなしにまねぶ。よしんば形に現はれぬ迄も、心に投影する誘惑は見免せない。有産が有産丈の學園を造つたら無産がひとりでに殘る。純粹な無産丈の學校もあつていゝ。それは當然プリンスブルからして獨自なものとなれるだらうから。

技巧はたやすく型を作る。型、カタログ、形の統整、形式陶冶。劃一教育の目的には申分なからう。けれ共今頃劃一教育の是非を辯へないやうな連中はまあ教育行政官の外にゐなからう。否、教育行政官にだつて少しは分つて來てるのに、大多數の校長に今も尙舊い型を墨守してゐるものがあるからたまらない。それといふのも行政官といふものが、軍隊に於ける將校ほどの權威を事もあらうに教育界に振り廻してゐるからだ。せめて宗教や藝術方面に對する位の手心でもあつてくれゝばいゝが。丸でローマ法王のやうな如意棒を揮ふものだから教育が教育家の教育に非して行政官の教育である觀を呈する。

行政官等は彼等の受けた教育を最上のものと心得るに不思議はない。立身出世が學校の目的化した社會に於て、自分等もこれでやつてきた、そして此の様に出世した。そうした自惚があるものだから改革的意見などは一蹴して顧みない。その上現狀維持が權力階級のモットウなんだから何はともあれ教育文は保守的に保守的にと抑へつける。何でもいゝから立身出世すればいゝの一點張りだ。しかるに教員といふものは出世に限りがある。生徒は限りある出世から見て教育家が行政官以下のもんだと心得てゐる。大臣でも學校に來れば、神様でも天降つたやうに驚異の目を

見張る。又その教員達の平伏さつたらぬ。

教育上の視學制度は、一種の探偵政治ではないか。あの爲に教育界の空氣がどれだけ息ぐるしいものとなつてゐるだらう。なぜ校長に全權が與へられぬか。なぜ校長をしてもつと恒久性のあるどつしりした落着のある生活をさせないのか。このことは丁抹國民高等學校を云々するものゝ尤も目を留むべき點である。村々に於て、尠くとも校長を招聘し保持する權限があつたらそれ丈で農村の教育はグンと別になるであらう。教育費の爲に正に破産に瀕せんとしてゐる村々で、このことが要求されないのが寧ろ不思議だ。村長なんか任命だらうが選任だらうがどうでもよい。校長だけはどうしてもつと土着的な生活と地位とを持つたものでなければならぬ。

村人よ、自由でも自治でも其名前許りでは何等の難有味もない。校長ひとり把握できないやうな自治が何で自治と云へるか。村で一番金のかゝる學校が村人のどうにもできないといふ事實は自治の名の手前からも可笑しいではないか。村から出る金を村人の爲に使へるんだつたら、村がよくなるまいたつてよくなれずになからう。昔から村人が必要に迫られて自然にできたものは凡て打壞はされて、ほんとうに心から理解されぬものが無理矢理に押付けられた。そして押

付けられたものは、悉く金のより多くかゝる代物だらけだ。村人に任かして置けば、儼しく經濟的に行けるものを服着た役人にやらすと高くつく、物入りがかゝる。自治なんてものもそうだ。完全な自治は村人の創造に任かすべきもので。法律づくめの組織化したものでふんじばることではない。ぎごちない法律の職能で、村人の長い／＼土着生活の間から産れて來る創造性のあるものを無視することは、遂に生活そのものゝ破滅に迄結果するから怖ろしい。明治維新は大政奉還に依つて幕が切つて落された。第二維新は農村自身の目覺め——自治權の完全なる獲得か、否らすんば奉還か——に依つて序幕を切つて落すかも知れない。

一切の振興は自力から出發しなければならぬ。國家でも個人でも、よそから助けられて浮び上つた只一つの例さへない。

村人よ、此の事にハツキリと目を覺ませ。農村の振興が、農村以外の何物かから來るかも知れないと思ふ空頼みをかなぐり棄てる。政府や政黨などの所謂農村振興が何十年何百年経つたつて要するに空題目に過ぎないことが、もう大低分つてもいゝ頃だ。そんなものに思を繋いでゐる間

は到底浮び上れるものぢやない。

振興はどんなにしたつて自分等自身の仕事でしかない。そして他所を見る間は自分達の脚下がカラになる。何んのかのと云つても、國でも政府でも其他の凡百の事業でも、結局は農村といふ單位の大群團の上に出來た上層建築に過ぎぬのではないか。みんな農村に依つて現に養はれ、維持されてゐるのではないか。あらゆるビジネス(實業)も亦農村の生産と、そして消費の上に、その命脈を托してゐるのではないか。

その證據には、農村振興の空題目を唱へ乍ら、農村の衰微をホツタラカシて來た其罰が今テキ面に都市の上にして國全體の上に来てゐるのではないか。それだけに農村が恰も彼等上層建築に依つて保たれてゐるかの如く見做されてゐる。農村が恰も彼等上層建築に隷屬でもしてゐるかのやうに。ハ、ハ、ハ、いざとなつたら自給自足に立てる農村ほど獨立性のあるものが何處にあらう。

農村から人を金を物資をどしどし奪ひ去つてゐ乍ら、あべこべに農村振興とは何かの補助でも出すことだと思ひ思はせてゐる。持つてさい行かれなかつたら、野に山に充ち満つるほど残つてゐるんだ。與へて而して取る、といふ支那の諺があるが、取りて而して與へず、只見せびらかす

のみだ。

ガンヂは英國の羈絆から印度を釋放せんが爲に、先づ英國の心臓ランカスターの血のめぐりを杜絶すべく、昔乍らの紡車を持出して旗印とした。非協同、非妥協はこゝまで行かなければ徹底しない。プリンシプルの同じからざるものと協同することは、結局自らの立場を失ふに了はる。

支配と搾取とは車の兩輪だ。文武兼備とはよくいふたものだ。それは支配階級と搾取階級との苟合妥協を意味する合言葉だ。官廳はその要塞であり、學校はそのバラツク兵營である。

土着民よ、自らの血肉を捧げ、私財を擲つて迄、あべこべに搾取者の僱兵を養成して貰ふよりも、自ら生き自ら守り自ら防ぎ得る**獨立義勇兵**を村々の中に養成するのが刻下の急務ではないか。

さらでだに、私經濟と公經濟とが加速度を以て反比例してゆく方今の時勢にあつて、吾々は物入りのかゝる割りに與へらるゝことの勢き機關なんか思ひ切つて、市井の巷、村落の間に獨立自由の私塾の出現を翹望して止まない。それはきまつて設備が不完全であらうけれ共、尠く共そこ



に全幅の人格とタマシヒをつぎ込んで教育に當る人間を發見し保持し得られたらどんなに村人の爲に仕合せであらう。教育は教育家が何もかも全部を所持すべきものでなくいかに自らを教育すべきかを知らしむるのが大いなる教育なのだ。それこそ一生に且つて施して悖らざる教育法だ。

### 一つの暗示——

私塾を建てる上に、一番の困難は、經營費——主として經營者の生活の資だ。その爲に大學以上の月謝を小學校に拂はせなければならぬ。

しかしそれも昔のやり方に則つていゝ。即ち食ふものを皆んなで作ることだ。學校に非して學園だ。學園の園は無意味に只シヤレてつけるのではない。それは農園の園だ。スクールとガーデンとの併合だ。勿論このガーデンはかのマ、ゴトのやうな實習園如きものとは違ふ。それは最初から生活の資をそこから稼ぎ出すつもりでかゝる。自給自足にシツカリと立てるほどの規模と施設とを持つたものでなくてはならぬ。(丁抹の國民高等學校の立て前もこれだやうだ)つまり自ら作りて食ふことの修業がその大部分の時間を取り、本読みやその他のことは極く僅かの時間で事

足るのだ。僅かの時間をあてがつておくと、いきほひインテンシブにやらなきやならなくなり、本を讀んでも印象的に頭に入る。本は一回以上讀まないことにきめると、却つて記憶し易いものだ。

「ガキも人數」といふ諺があるが、生徒の勞働力の總和も輕視できぬだらう。廣ろい演習地の原ツバで兵隊などのやる作業から見ても、團體の勞働力といふものは素晴らしい事功を擧げる。その上勞働が遊戯とまで、やりやうに依つてはやれるものだ。頭を使ふものに取つて、野良に下り立つことは一種の新鮮な醫治だ。

昔の高僧が、よく人跡未到の荒地に開墾をやつた消息を懐ふ。教化の前に、伽藍の前に、先づ開墾をやつた周到な用意の程をおもふ。

又、僧侶といふメタフィジカルなシヨウバイのものに、フィジカルな勞働がやれるといふ這箇の消息。

一日作さず、一日食はず、の立て前。

私塾を起さんづ行願を抱くものに取つて、金縛りの文明社會は悉く障害許り示唆するが、古人の行跡には流石に盡きせぬ暗示がある。

株式組織の國民高等學校も出来るそうぢや。

悠々上古 厥初生民  
傲然自足 抱朴含真  
智巧既萌 資待靡困  
誰其贖之 實頼哲人  
○  
哲人伊何 時爲后後

贖之伊何 實曰播殖  
舜既躬耕 禹亦稼穡  
遠若周典 八政始食

○  
フラインなカルチュア、  
田家と學校と

あつちの水は苛いぞ、  
こつちの水は甘いぞ

東洋四千年の文化と  
西洋三百年の文明と

人間と、機械と、  
生命と、製品と、

ミレイとアグリカルチュア

ロンドンの本屋町チャンスリー、レインのとある大きな本屋に、キヨロ／＼した新米の東來人とうらいじんが入った。中學卒業生が丸善にでも入った體よろしくで、見れども見えざる目を八方に輝してゐたが、とても探せそうもないので居合はせた店員に聞いた。店員は早速小形の挿畫澤山の本を持つて来て見せた。おなじみのアンゼラスの繪を見當てる迄もない、そのどの繪を見てもまさにまがふ方なきミレイの本であつた。ミレイ、何んといふなつかしい名か。その昔、徳富健次郎さんの黒潮第二號の豚殺しの繪ときがほどその最初だつたらうと思はるゝミレイ敬慕の一念が、とう／＼ロンドン最初の獲物で届いた形だつた。

しかるに、その店を出る時の彼の手には小型の本の代りにやゝ大きい本が握られてゐた。それは別のミレイだつたらうか？ あらず、アグリカルチュアといふ金字が背のところに光つて見え

た。

彼はそれから朝早く起きて下宿の小さいツキランダで辭書を片手にそれを讀みもて行つた。ハイペリーの小公園に夕方散歩する時にもそれをはなさなかつた。

望素だの憐酸だの沖積土だのいふ字を新しく覚えて何がなしに面白がつてゐた。

これが實に私に取つて一生の謎の解け目であり、一大轉機の暗示であつた。一生の浪費のシンボルは正にこれだ。俺は涙と共に此事を懺悔し、血と共に磊塊を吐く思ひだが。

アメリカくんだり迄行つて、血を洗ひ乍ら學校を續けやうとしたこと、こともあらうに農業を學校で學ばうと企たしたこと、おまけに、大農、機械、スベキユレーション。へゝゝゝゝゝ。俺の笑ひ方が痴呆症のそれではないかい。君！

助から流れる血で

「君はあまりに、君一己の經驗に偏して物を言ひ過ぎる。君のやうな人間がそう澤山ゐるものぢやなし、君自身の體験に依つて、そのまゝ獨斷的に言ひ去るのは、却て讀者を惑る基ではないの

か？」

こう親切な友人が親切でかしに言ふてくれる。

「フー。俺は普遍妥當の眞理だのを、普遍でもない言葉や方式で述べ立てる人間ぢやない。俺は俺自身を試験臺にして人<sup>ロマン・エクスプレシント</sup>生<sup>生</sup>實驗をつゞけてきた。俺は自身をいけにえに捧げて、自分の肋<sup>肋</sup>から流れる血で以て告白を書く。元より多くの讀者なんか期待してるのぢやない。俺は俺のやうな素質のものに、再び取り返しつかない浪費をなさしめたくないばつかりに此の事を言つてるのだ。」

「そんなら純眞に自己體驗の告白にのみ習つたらいゝぢやないか？ それを理論化するやうな點が危険だね」

「それは勿論體驗許りに生一本に行ければいゝ。それは俺も望むところだ。自分の體驗がシツクリするまで表現できればなあ——。けれ共始終求め、憧れ、とゞのつまりめくらめつ法界に實行に奮進するクセのある俺にはどうもそうした落着や餘裕がない。で言はうと思ふことは影もパツクもなく端的に言ひ放つて、そして自分でセイ／＼する。それ丈のことだ。」

「ぢやア、それを序文にことはればよかつたね。」

「そうだつたね。が、序文なんていらんもんだとふだん思つてる俺には、あんな前置なしにぶつつけに書き、まつしぐらに本文に入る方がいゝと思ふからね。どうせ序文で埒のあくものは一つもないんだから。」

「序文ではないが跋文になつたわけだネ」

「自分に止めを刺したんさ。」

## 大自然のぶつきかき

### 一、出 水

出水だ。が、風は全く死んで漣一つ無い。岸邊に残つた枯れた萱や、柳の枝に堰かれた水のみ  
ビリビリと振れて流れる。中流は細い勁い條を束ねたやうに、落着いてゐ乍ら又迅く流れてゆ  
く。

空は濛々として今にも降りさうで降らない。所々明るい所も出て、明日は天気かしらといふ氣  
も起さず。

何處といふアテもなく、雲雀の陽氣な囀りのみが聞えてくる。

里の近くには屑でも焼くのか、白い煙が長閑に立ち上る。

鐵橋の上を貨車が通つた。無蓋車の上に人影が二つ、象形文字のやうにクツキリと體を曲げて。  
桂根の石油坑の煙は、消え残つた雪の片みたいに宙宇に浮んでゐる。しかし右手の新屋の改修  
工事場からは煙がモロモロと立ち上つてゐる。

堤防の馬トロの方で何やら人聲がざわめいて、時々オーイと大きく長く呼ぶ聲がする。對岸の  
新屋驛に停車した汽車がシュツシュツと喘いでゐる。

曇つたせいにか、それとも夕暮が近づいたのか、あたりはドンヨリと暗くなつて來た。

大河は音こ一つ立てない。只一ぱいに、汪洋として流れ下る。

### 二、入 梅

十二日間といふもの實によく晴れわたつた天氣が続いた。朝は雨後のやうなガラガラした水霜  
で、晩は四時頃から涼しいよりも稍々寒い風が海の方から吹いて來る。袋かけのやうな軽い労働  
では寒けがする程だ。それでゐて日中は眞夏のやうに暑く、堤防工事に來てゐる女達は何かと云  
つちや水桶に集り木蔭に身を避けるのを見た。

十三日目になつた。その日は九時頃から空が薄白く濁つて、太陽は幽かに其所在を指呼されるが影が極めて鈍かつた。午後からは益々曇つてゆく氣配だ。けれども一昨年は今頃も早魃で、今にも降りさうで降らず、朝になると忘れたやうにスーツと晴れ上つて、百姓達を失望させたので又アテにけならぬと思つて、乾いた新田に水をかけるべく排水堰を留めにかゝつた。馬トロに行かうとして来た純と周に、板など運んで貰つて、自分で堰の中へ入つて留めた。馬を洗つてゐる若者達から、「一生懸命留めて今度はすつぶりぐる程來なければいゝが」などと揶揄されたら自分も何だかそんな氣になつて不安を感じた。それでもやる丈のことはやつて置くといふ意志の修練を習慣つけようとする此頃の日課に従つた。

その日は二度ばかり見廻つた。水は止めた菰の裾を浚つて下の方から逃げてゐた。又堰の中へ入つて、泥でそれを塞いだ。晩迄かゝつて漸く全體の四分の一位しか水がかゝらなかつた。

翌朝は全く雨模様になつてゐた。床の中でバラバラ屋根を打つ音を聞いたやうだつたがそれも途絶えた。果して降れるかな——馬トロがゴロゴロ繰り出して來た。

モヤモヤした空の南に寄つた側に、銀河でも懸つたやうに、濃厚な雨雲が斜に浮んだ。それか

ら來るのか、時折一點二點數へられるやうに雨が落ちて來た。急いで玉菜やトマトの苗を移植した。それが略々終る頃に愈々降り出して來た。馬トロも何時の間にか居なくなつた。

道が泥濘にならぬ中にと洗足のまゝ町へ出た。途中で蓬々たる髪と髯とを刈つた。保戸野へついたら、オバサン達が厩も露はに端折つて、胡瓜や玉菜の移植にかゝつてゐた。雨はまだ外に居られぬ程でもない。自分もすぐ手傳つた。

その中、妹の見舞客が來たので止めて家へ入つた。その頃から雨がだん／＼量を増して、もう止みさうもなかつた。

夜中に目を覚ますとザンザン音を立て、降つてゐた。梅雨にしてはあまりに勢が強すぎる。乾き切つた地の上に、かう一時に降られては、充分地に沁み込む間もなく、水は表土を走つてまっしぐらに川々に注ぐだらう。

——五月雨を集めて迅し最上川——

又雄物川の増水を氣づかひ出した。

雄物川の増水！ それは私にとつては鬼門だ。それを思ふと胸がドキンとする。果樹はまアい

として、其他の野菜物は、自家用さへもなく盡なしになつてしまふ。幻滅、犠牲、浪費——私はそこに投機者の敗亡に類する、沈衰と沮喪とを嘗めて、額の皺を更に深くしなければならぬ。

ハツハツ……、凡てはファスト、ステツプを謬つたのから來てる。よしそれは承認する。さらば終りまで忍んで見せる。終りまで終りまでと妙に意地が張り出す。ドンツマリまで食ひ込んでゆく。

手足を動かす徒勞に堪えねば頭だけ動かして。——土にアイソが盡きたら空の美しさを眺めて。——人間はどのやうにしても生きてゆけるものだ。

——折れたまま咲いて見せたる百合の花——

### 三、川 霧

南に遠く、堤防の盡くる上から、高雄山が東に向つて太平山と會話する。頂に一本離れた大き

な杉が神社への入口を示す。あの麓に露月山人が臥龍するのだ、と其度毎に思ひ出す。

その高雄から、南西に向つて一帯の山帯が走り出し、それが勝平山で盡きる、日本海を遮るものは、砂丘といへばいへるその高くない山並だ。或る夕方、私は勝平山の横の所に男鹿山の翠微を望んだ時は、思はず胸の躍るのを覺えた。風のない靜かな朝に、何かしらゴォーと遠くで音がする。をかしいと耳を澄ます間もなく、それが日本海の濤聲とわかつた時の驚きに似た歎び。

石田坂から新屋にまで連つてゐる丘陵には、松林や、雑木林が隙間もなく布置されて、たまにはゼツション式に植え立てられた杉の若い林も交つてゐる。

川上の方から徐かにく流れる川霧の揺曳するにつれて、對岸の山帯が高く低く隠見する。奥まつた山はかくれて近き森が突兀として現れ、あすこにあんな山があつたのかと思はず目をみはつたりする。

大河の縁に立つと、日の出の前觸れとも云ふべき「さや風」が身に泌みて感じられる。空氣の對流が川の流に依つて更に促されるせいであらうか。顔を洗ふ必要もない程、それは睡氣を覺ま

すに充分だ。

#### 四、朝の西空

朝は空に幾らかの雲がないと面白くない。今朝は東よりもむしろ西の空に雲の色のいゝのがあった。

東の空は日出を焦点として局限されてゐるが、西の空は中空がらみ容れてゐるので、非常に広い。バックが實に大きい。大海原に雲の映つた形だ。

其色も東の空には見かけない、紅ともいへず、桃色ともつかず、珍しい茜色だ。

東の空の色はあまりにも慌しく變る。そしてそれが金色になるともう平凡だ。金色になる前の色の變化が面白い。故にほんたうの曉の色の變化を見るには、東が白み亘るとすぐ起きぬと駄目だ。此頃だとまア三時前後からだらう。

山や木立の黒サ、

草野にサヤサヤと明るい光の走り来る足並。

河が睡りからの覺めきは。

残月の冴え、白くジツと懸つてゐる冷々然たる落着き。

遠くでやつと一番鶏の聲。

もしそれ星の爛干たる頃からの、隣近いうるみある星群の隣から見られたらよほどの果報だ。

ア、朝は何と言つても夏の朝に限る。

#### 五、嵐の前

大あらしの來らんとする前兆が、マザマザと現はれてゐる朝だ。雲が狂踊亂舞を恣にしてゐる濃いドス黒い雲の下に、透き通るやうな雲の一條が朝日を受けてチヨンピリ光つた。

反對の側、即ち西の空一杯に、宛ら濁流の渦巻くやうに密雲がムラ／＼と北を指して流れる。

暫くして南の方から、光を受けたボサ／＼した雲が現はれ出し、やがて西空が悉くボヤされて了ふ。

男鹿山の上のあたりは、鮮藍の帷を隙間もなくピツシリと張りつめて、その片隅に綿の入つた



裳がしどけなく押しこめられてある。

私は裸足で堤防の上をテンテン跳ね廻つた。」

## 六、落 日

夕陽の沈む頃の壯觀、雄大、そして歡喜！

あゝ筆を折り刷毛を投げてまアこれを見ろよ。

新屋の上の砂丘の頂邊に立並ぶ松の一本々々が分明に指呼される。その箇々の枝ぶりまでクツキリと書き出される。

そこらに彼が落ちて行つたのであらう。何の遮るものもない西の大空に、或時は落ち行く夕日に對して挽歌でも唱へる爲に集つたやうに合掌した雲が簇り、或時は我不關焉たる孤雲のニツ三ツが、その縁丈けを眞紅に染められたり、或時はそこら近邊一抹の雲片さへなく、團々たる大日輪が今こそ大往生だぞよといはん許りに、大きな見得を切つて六法踏み乍ら花道を退さり行く。そんな時は大提灯から、半輪の月影、金の柳眉、そしてその後の磅礴たる餘燼。

小舎の前のケアンバスの長椅子に、勞働に疲れた體を投げかけてみると、此儘自分も往生するのではないかしらと思ふ。

## 七、洗 足

雨の降りだてに、人通りのない早朝か深夜の街路を洗足で歩行く氣持ちはいい。

人が出て、泥濘になつた頃はもうだめ。乾いた砂利のパンとしまつた道に、雨がポトポト落ちる中を尻端折りであるくと、いくらでもあるける氣がする。シツパネのかゝる氣づかひもなく、足にまつはる何ものもない。

原始人の脚の皮がほしいもんだとつくづく思ふ。

夏の暑い日中に、かへしたての土を踏む心地もいゝもんだ。濕りを帯んだ心持冷たい土が、ほてつた足の皮に觸れる肌さはりはたまらなくいい。

此二三日、豆のサクをかけて一直線のきれいな細道が梨畑の中についた。朝起きだてから八時

頃までミツチリ働く。

横さまに朝日を受けた梨の葉影に、鎌を動かす爽かな氣持！

## 八、深夜の逍遙

舊盆の頃の毎夜々々の月明。――

夜もかなり遅く、人通りの絶えた町はづれの大道が、月の光りにポーと白く横たはつてゐる。兩側の稲田は微茫としてそこはかとなく連つてゐる。顔にあたる虫もない。脛にまつはる蚊もゐない。晝はゴミツポイ街路も、夜は露にしつとりとしめつてゐる。秋の近いことを思はせるやうに道傍の叢に虫が鳴く。

月は中天に上り次第に光りが白くなり、そして小さく冴えてくる。星はいたつて疎らだ。

自然木の櫻のツツカイ棒をステツキに、それを肩にかついたりし乍ら、尻まで裾をまくつて、此頃は夜遅くまで田圃の中の大道を往つたり來たりする。

此頃、夜半に小便に促されて目を覚ます。

濛々とした空に星がごく疎らにしか見えない。桐の葉が上の端丈バサとして暗の中に浮いてゐる。虫の音が、小高い所に立つ自分と、後ろの小舎とを天にまで浮き上げるやうに鳴きしきる。暫し暗の中に立ちつくす。自分の居る所が、ふだんの自分のゐる所と全く違つた氣持におびえさせられる。

もしそれ、月の落ちたすぐ後の星空の麗はしさ。月があるとそれを伴侶として、わりに淋しくないもんだが、隅から隅まで星のツラリと並んだ空は怖ろしいもんだ。

人間？　ヘナチョコ奴と云ひたくなる。豆粒大の土の上にわめきあかつて。

## 九、秋　立　つ

今朝の雪！

碧瑠璃の空に、ごく緻密な白い本麻の蚊帳を一ところに張つてある。

その縫目も縫目もハツキリと見える、何といふスガスガしさ。

こんな時、地に腑して働くのは惜しい。  
空許り見つめて居たい、

ア、蚊帳の縁に、白いホチャ／＼の綾雲が、  
フツフツとくつつ付いてゆく。

雲の外は、凡て底知れぬ碧潭、

なんといふ碧さ！

目に泌みるではないか。

ア、秋だ、

私の目に、私の肌に、私の心に、

秋はヒシ／＼と迫ってきた、

虫の聲、風の音を引ばる迄もない、

空の色さへ、雲の居すまいさへ、

秋立つたことは、もはや争はれない。

こんな朝には家の中で顔は洗はれない、

スツールを外へ出してその上に完く白い洗面盤に井戸から汲み立ての水を湛へ、

楊枝とコップを置き添へた。

粉は此頃使はない、アツナ不純物、

口のあたりにニチャ／＼と涎で溶いたペンキの飛沫、

着物の袖や襟に白粉の粉を氣にする迄もない、

カスを刷いて清水で洗ひさへすればよい、

ガラ／＼なんかへドが出る。

つい此間妹に刈つて貰つた一分刈の青坊主、

自分で剃つた顔のスベ／＼しさ、

ア、涙み立ての井戸水の肌ざはり、

顔を洗つてもう一度空を見まはした、

ア、白いホチャ／＼の綿雲はどこへ消えた、

蚊帳の目は益々細かく、だん／＼にちぢれて、よれて小さくなり行く。

それもその筈、朝の大王が、

もうニユーツと大きな光りの腕を幾本も伸して、

ベッドの帷りの中で目を覺しかけた。

今にも、蚊帳や、帷りを踏みしだいて、

ウワーツと躍り出しさうに。

## 十、晩 秋

顔に當る風が辛辣な冷たさを持つやうになつてきた。

山の露はな部分に立つ樹は凡て落葉しつくした。只、山懐ろにある雑木林のこんもりした茂みが、黒ずんだ紅葉をわずかに保持してゐる丈。太平山のヒダは只一色の寒い藍色に納り返つて、頂上のあたりに漂ふ雲も、充分に雨氣を含んだ重々しい團塊が多い。所々雪の空いた所に、朗らかな碧潭の代りに白く濁つた肌が見える。

日は照つたかと思へば陰り、雨かしらと足を速める間もなくまたシラシラと照つてくる。

一本の穂場もない田圃は、稲のある時よりも遙かに狭まつて、向ふの山がいやに近く眼に迫る。川ぶちや沼のまはりに、枯れた真菰の黄いろい色が際立つて見える。裸かな樹梢の下に村里はうづくまつてゐる。

畑には大根引が初まつた。只一色残つた鮮かな青味が失はれると、愈々野も裸にされるのだ。

白い太い田舎アネコのふくら脛のやうなのを幾本も／＼馬の横腹に垂れさして、小高い堤防の上を通つて行く。

芒はもう綿のやうな穂をふくらませて、風のまに／＼飛ぶの間がないだらう。野菊も小さい

綿帽子を被つた。ぬかるみを避けて田の畔を渡ると、イチクサレ（田うこぎ）が裾にヒツついてくる。蝗は老ひて飛ぶ力もなくなつた。

冬の近づくのにおちけてか、人々はうつむき加減に忙しさに歩いてゐる。

## 十一、北國の冬

十一月に入ると、風は北西の一方に偏して日とともに其荒さを増す。樹々の枯葉を吹き落しても、まだ足りないのか、裸になつた樹梢を呻らせる。野分から木枯、それから吹雪、と風はだんだん怒りをつのらして行く。朝からオツトリして、夜にまでおとなしく入る一日はたまにしかなく。

いつの季節だつて風の嫌ひな自分のやうなものにとつて、秋から冬にかけてのえらひどい風の連続は實に堪らない。斜になつて自分で自分を支え乍ら、吹きつ晒しの曠道を歩く時、足にからまる外套の裾が心をいらいらさせる。何物の遮蔽もない野原の一軒家に、風は一杯の手を擴げてドシンと打つかる。ミリミリ、ユツユツと揺がされると、いくら夜具を深く被つても夢は仲々

結び難い。五日も七日も続けられると頭が空洞になつて、打てばガンと鳴りさうだ。さうした後にはたつた半日の静かな日でも、トホツとなつて了つて魂はツツと大地の中にめり込むやうに感ずる。

もう日の光りを見ることなどは問題外だ。たまにホツカリ顔を出すやうなことがあつても、すぐ後から〜と襲ひ来る雪にかくされて了う。それはむしろ氣まぐれな慌しい感じを残す丈けで薄い弱いその光りは最早や人々の心をなごます力だにない。

もうかうなると出来る丈け家の内に許り居ることを考へる。外にはもう用はないと云つた形だ。北海道から来る安い悪いハネ炭を爐にくべて、ポウ〜と青火を立て、燃える毒瓦斯を吸つてゐると、どうしたつて頭も何もだらけずには居ない。本なんか手にすると一ページも繰らない中に睡くなつて了ふ。かういふ時だ。つく〜南の國が戀しくなるのは。

然し、雪が固まつて了ふと人の心はよほどピンとする。季節がその行くべき所に行つたといふ落ちつきで、私の心もあきらめ落ちつく。時雨から雲と、散々泥濘になつた道路も、コンクリート張りのやうにガンと固まる。空は依然たる灰色乍ら、地上の白一色の爲に餘程明るくされる。

おちこちの村里は、或は山の麓に或は枯木立を取圍んでホチャホチャとくつき合つて暖を取つてゐる。この頃だ。太平山が儼然たる威容を整へて寒空に聳え立つのは。

子供等は丸く着ふくれて手を引込みし乍ら、何かと言へば母親に食へ物をせがむ。ものゝ十分も外に出て、ヘラで雪をいちつたかと思ふと、両手の甲を赤く腫らして泣きべそをかき乍ら入つてくる。「だから行かなきゃいゝのに」が毎日のやうに繰り返される。日の短い今は、三度の食事が母の大部分の時を奪つて了ふ。夜は夜でシンシンと背中から押寄せる寒さと、何を爲るといふこともないアンニユイは床の中の避難所を懐はせる。斯くて朝。——そして又夜。——

## 農業を指導する者

一頭の種牡牛、一隻の河舟、一臺の手織機、これが嚴めしい肩書の教授よりも、幾多の宣傳的な刷物よりも、はた又、思想そのものよりも、どんなに農民達の刻下の必要に役立つことか。

ホレリス・ブランケット

農業を指導するといふ役人、技師でも技手でも乃至村々の技術員でも、押しなべて最も重大な一つの資格が缺けてゐる。それはその技術とか頭腦とかいふのではない。是等の役人達に百姓で食つた経験がないといふことだ。之が何よりもかによりも最も重大な缺陷だ。百姓の眞似事なら学校の實習園とかで、運動の一種としてやつたこともあらう。けれ共百姓で食ふたといふ経験は否百姓で食はうといふ氣構へさへもが、未だ嘗てこれらの指導者にはなかつたのだ。自分で百姓をしようといふ氣もないやうなものが、實際の百姓の指導者になるといふことは何といふ矛盾何

といふ僭越であらう。

これらの指導者は、殆ど悉く學校卒業者であるが、學校の實習園といふもの程不成績なものはない。それもその筈だ。實習といふものが、科學と實際との一致相關といふ眞剣な場所ではなくして、ホンの體操代りの運動と見做されてゐる。そして、學校に於て一番學生に嫌はれてゐる科目は、農場に於ける實習である。外の學業なら知らず、苟くも農業といふ仕事は實習の外に何がより以上の重要サを持ってやう。

然らば教室内の教授はどうだ。これとてホンのカイナデの教科書學問にしか過ぎない。第一、自然といふものゝ正當な理解から出立して行かなければならぬのに、却て個々の作物に對する零細のそしてツギハギの智識しか與へられはしない。斯うして何ら徹底した科學的修練を、其頭腦の上に受けるでもなく、又は徹底した技術上の熟練を其の手の上に、否そのカラダの上に受けるでもなく、アヤフヤな智識とナマクラな體つきで、卒業免狀といふものが、單にその年數の上に無雜作に與へられる。そして免狀を握ると直ぐ何かしら月給取りの口をさがす。そしてそれからの一生涯を、官廳の机と椅子の間に過すだけだ。

かうした履歷を有する人達の指導が、産れ落ちるから泥まみれの中に育つ、地に生え抜きの百姓達に、どれ丈の効果があり得やうか。科學の實驗が試験管の中でやられる間は、まだやさしい物理學が實驗器具の中で動くうちはまだやさしい。不可抗の天候と、不可解の土壤を相手に、極めて制限された金力と學力とで、何事がよく試験され得やうか。

彼等指導者の獎勵することは、悉く、より金のかゝる、より學力のかゝる贅澤な施設だけではありませんか。その上何も自分で實驗の上で確めたことぢやないので、只單に書物の上や、或は他人の報告から氣付けられたことを、其儘受賣りしたに過ぎんのだから、第一絶對の自信も責任も持てはしない。従つて、時たまバカ正直にその指導の通りをやると、秋收の時になつて一人ポツチの凶作をとるといふバカを見ることさへあるのだ。こんなことで、どうして日本の農業の進歩が望まれるものか。これはどうしても指導者たるものゝ素質と、資格を別の方面から嚴密に審査した上採用するより外に道がない。

かういふ點では、昔の方が却てよかつたと思ふ。昔は兎に角老農といはれるほどの人でないと指導者の位置には立てなかつたやうだから、即ち、其人自身の長い一生の艱難辛苦に書書されて

発見された栽培法なり、經營法なりが、充分一般の百姓の模範たるに足りたのです。伸々今頃のやうに、單なる卒業免狀一枚で、ノコノコ指導者の位置に立てるやうな、生ヤサイものではなかつたらうと思ひます。

曰ら百姓で食ふた經驗がないといふことは、更に他の方面に重大な缺陷をなしてゐます。それは「一箇の世帯」生計としての農業經營法を知らないといふことです。實際、今の時は農業も栽培法の優秀丈では立ち行けなくなつてきました。收支計算の上からは、栽培よりも販賣の問題がより重大になつて來ました。而して現今の經濟組織の下に於ける市場といふものは、舊來の百姓達に取つて最も不得手な苦手なのです。彼等は其市場を左右する何等の實力がない許りか、市場に順應する才能も六ヶしいのです。

それが爲に、折角難儀苦勞して生産をしても、甘い汁は悉く仲間商人に吸ひ取られて、彼等は正當な勞銀にもつかない不安定なそして寡少な所得しかないではないか。生産を幾ら奨励しても市場の組織が正當でない限り、生産者も消費者も、何等の幸福を受け得ないで、只中間商人の懐が肥る許りなんだ。

然るに此方面の研究は從來殆ど閉却されてきた。指導者は十年、廿年、殆ど一日の如くきまきつた栽培法の講習講話許りで、肝腎の販賣とか、金になる作物の選定とかいふことについては丸で盲目同然であつた。これなども彼等に實際の百姓としての生活經驗のなかつた當然の缺陷なのだ。尨大な國家經濟に寄生して、その生活を仕事の能率よりは、官僚の主従關係に依據してきた今の役人達は、生産者としての苦勞を知らない。きまつた豫算を漫然と使用してゐる文で、如何にして尤も効果のある仕事に使用すべきかなどといふことはトント思ひもしない。勿論下級官吏は其中でも比較的實際の事情に通じてゐるのだが、彼等には發言權がないから仕方がない、すべてが天降り案の盲従にしか過ぎない。こういふ連中のやり方は、兎角收支計算を度外視するやうなのが多い。いくら學理上肯定されることでも、生産費の多くかゝる計畫は、元來餘裕のない今の百姓には、頭から出來ない相談である。それを實際の百姓の資力で色々工夫してやりくつて行くといふやうな、細かい用意はとても彼等に望まれない。而もこういふ細かい立入つた用意が出來てゐないでは、到底農民の爲に親密な指導なんか出來るものではない。そのみならず、學校の實習園でも、農事試験場なんかでも、大勢の人夫や高價な肥料を使つてゐ乍ら、その成績は少



しも實際の百姓を感服せしむるに足りないなどは、彼等の農業家としての能率がいかに貧弱であり、そしてその智識がいかに半熟であるかを證明して餘りある。こんなことではいくら指導者許り多くても、日本の農業の發達は望まれません。

少し横道に入るが、一體日本ほど、重複した行政機關のある所は無いらうでせう。たとへば、農業方面にしろ、試験場だ、農會だ、縣廳の農務課だ、郡の勸業課だ、と實によくある。そしてそれ／＼技師だの、技手だのがウヨ／＼ゐる。

官僚組織といふやつは、強壓政策の執行には都合がよからうが、行政機能としては、全く不經濟極まる組織だ。各々の機關は、それ／＼特異の機能を持つて働くのでなければならぬのに、同じ色々な機關が互に入り亂れてやつてゐる。どうせ人間のことだから、その間に勢力争ひが生じたり、感情の衝突があつりして、その都度色々部下とか學閥とかいふもので渦を巻く。人間は多いが、どれも之も同じやうな技能の人達で、従つて融通はきくだらうが、ほんとうに百姓の中に立つて「證し人」となり得る人は一人もない。その頭の組立が土から離れ、その手の皮は土の粗糲に堪へない人達が、どうして百姓の實際から湧き起る色々な疑問、色々な苦悶に對して親

切な相談相手となり得ようか。——「俺に歎を持たして見ろ、自分で食つて見せる」——といふ程の意氣込がない人達が、顔を赤めないで土の中に苦勞する百姓達の前に立てるのが不思議な位だ。

機關は一つでいゝ。農業といふやつは分業では立ち行けない。混業だ、而も渾然たる混業でなければならぬ。穀作、畜産、園藝、手工等を、適當に組合した意味での混業でなければならぬ。

日本に於ける農業は、耕地面積の狭少な爲めか、兎に角單一になり易い。假令ば、米作地へ行くと稲作一方で、家畜も養鶏も果樹も各戸に幾らかづつやられてゐるといふ事がない。さういふ種類の仕事は、各々専門にやらなければならぬと心得てゐるものが多い。その爲に、百姓でありながら卵をよそから買つたり、子供にやる果物を、店から買つたりして、さらぬだに乏しい財産からよけいな小使までも支出してゐるのである。どんな小作人にしろ、田舎に住んでゐると、宅地の一部に數本の果樹、數羽の養鶏の出來ないわけではない。けれ共彼等はさういふ仕事を引合はして行く爲には、特殊の技術を要するとなして、仲々手を出さない。

成る程、それらの仕事には、それ相應の技術を要するのは當然のことだが、それ位の技術さへ與へられて居らないのは、いかに一般の農人といふものが、粗笨な低級な養成の仕方をやられて

来たかを推察し得られる。

末廣殿太郎氏は農村出身にもあらず、又所謂農政學者でもないが、その毎々發表される農民關係の論議には、實に敬服に値するものがある。今年一月の朝日新聞にも、小作權に關する一文を寄せ、農民が、かの自作農創成法案なんかにだまされる愚を、いましめられたが、嘗て雜誌改造に寄せた「農村生活と貨幣經濟」といふ論文に於て、

「明治時代の法制及び政策が劃一的であつたことは、色々の方面に於て、實際的不都合を來してゐる。各種の施設が、大體に於て都會本位であつて、都會と農村との本質的相違が充分に意識されてゐない。元來農村は、實物經濟的であつて、金錢といふものが不自由で、従つて貴重なものであるのだ。所が爲政者は、農村に向つても都會に對すると同様に、金錢のかゝる施設を要求し、或は農村の住民をして、益々金錢の必要を感じしむるやうな方策を實行する、加之、資本主義の影響は、農村生活までを漸次に貨幣經濟化し、その爲め農村今日の窮迫を來した。」と云つて居られる。

我が農民は、此事にハツキリ目を覺まさなければならぬ。農村は本來自給自足に近い經濟の立

前を取る時に、一番安定なものはあるが、現代に於ては絶対にそれは許されない。何もかも貨幣經濟化して了つた。凡てのものが貨幣に依つて交換されるのである。そして農民の手で出来るものは、貨幣價值に於て、低くして且つ尤も相場の變動が甚しいのである。

かういふ時代に於ては、農家の經濟を助くるものは、年中萬遍なく幾らか宛の金が入つてくることです。穀物專業のやうに、年一回の收穫勘定では、經濟の取り方が極めて困難なのです。年中ぼろ平均した収入のあることが、最も安定した生活様式であります。それには農業を従來よりも、もつとく複雑にして、乳牛、養鶏、養蠶、果樹、蔬菜、養蜂、其他家内工業などを適宜に接排して營むとが極めて肝要なのです。此點に就てて、西洋の農家は乳牛といふものでどんなに效はれてゐるかわかりません。西洋の牛乳の消費量は、日本人の味噌汁よりも、もつと多くもつと無くてはならぬものです。その爲に市場に遠いと近いに論なく、農家では必ず一二頭は飼つて一は以て自家用に供し、剩りは或はバター、若くはチーズに製造して、どんな遠方からでも出せるのです。牛乳は殆ど年中、毎日のやうに幾らか宛の金を入れて居るのだから、農家の生計を助くること甚大なものです。丁株などの農家の有頼なものと、組合組織の旨く行つてゐるのは、全く乳

牛のお陰だと言つても過言ではありません。蔬菜栽培にしても、春にのみ播種するのでなしに、大に秋播き作物を奨励すべきです。果樹でも春から秋まで、萬遍なく収益を擧げるやうに、種類と委節の按排を計るのが必要です。私は、従来日本の農業界に行はるゝ主業副業の區別を取り去つた方がいゝと思ひます。農業の副業と言つたら、農業ではない、工業とか商業とかを片手間に營むことで、同じ農業の中に含まるべき畜産、園藝などは副業なんかではない、農業を構成する各要素であるといふことにハツキリと目を覺ますべきです。収入の道を多岐にするといふ心掛は現下の農家經濟に、一番必要なことです。單一農業では最も經濟界の變動に打撃を受け易いのです。複雑な農業ならば、一方の不作を他のもので補ふ、たとへば稻作の不況を、養豚で補ふとかいふ風に一年の努力が、全然失敗に了はることから免れ得るのです。

然し乍ら翻つて考ふれば、かうした複式農業の爲には、現下の農民がいかに不適當に養成されてゐるかを思はずには居られない。それはひとり農民許りではない。かの技術者と稱する指導者階級も、亦最も不適任に養成されてゐるではないか。専門技師と言つても、實際の經營から見ると、其の技術はいゝ加減なものだが、専門以外のとには、殆んど風馬牛な手合が多いから驚かさ

るを得ないのです。それからして第一間違つてゐる。學校で四年も五年の間、やれ稻作専門だの、畑作専門だのとやつてるのかしら？——もしさうだとしたならば、何といふ不經濟な、そして非能率的なやり方だらう。そんなことでは、益々以て實際農民の指導者としては不向なのだ。非能率とは、勤惰の問題ではない。能力の問題だ。實力の問題だ。身體につけた藝の精疎の程度だ。

日本人の能率のあがらないのは、全く學校教育の謬まれるのから來てゐる。即ち、學校に於ける人間のトレーニング（鍛へ方）が謬まつてゐるのが根底的の缺陷なんだ。頭許りで手の教育をおろそかにしたこと、教師そのものからして、尤も非能率的な代物だから、それから教へられる生徒が非能率的なのも當然なワケだ。

農業だけは何と言つても手から學んだのでなければとても／＼駄目です。セオリー（學說）は後からでいゝ。手と身體のトレーニングが最先に來なくてはならぬ。アダルト、エヂュケーション（成人教育）ならばセオリーがいゝだらうが、青少年の教育は先づ何よりも手をよく使ふ手近なユーズフル（實用的）なトレーニングをやられないでは、到底成人の後にも、ユーズフルな人間と

はなれない。

獨逸では、學校上りの若者が、必ず何處かの農場に入つて、見習生となるか、或は副支配人となつて、滿二ケ年間、而も同一の農場に於て實地修練を積む習慣になつてゐる。見習生はそこに居る間、自分のすきなものに手を下す自由を有する代りに、そこに居る間の入費は自辨しなければならぬ。副支配人として相當の給料を貰ふならば、よく働人を監督し、且必要のことは何にでも手傳はなければならぬ。富有な農家の子弟であり乍ら、將來自分が財産を繼承した時に謬を重ねざらんが爲に、副支配人を志願するものも随分多い。かうしてミツシリ實地の修業を積んでから更により深く研究する爲に、大學に進むといふ風である。

そして、彼等はその研究を單一にしないで、成るべく各種の廣汎な修業を志す。たとへば、農産製造、馬鈴薯からアルコホルを取る工業だとか、甜菜糖工業だとか、或は養魚事業、殖林事業といふ風に、農業に關係した各種の部門にまで研究の歩を進める。殊に獨逸に於ては、最大の讀書家は農業者であると言つていゝ位に百姓はよく讀書する。従つて、彼等の頭腦でも能力でも、決して都會人と比べて、劣るやうなことはない。多忙な外の職業の人達と比べて、その修業に於

て少しもヒケを取らぬといふのが、實にドイツの農業者のエライ點である。

教育のことは、いくら言つても切りがない。試験といふものに、死驗されてゐる今の學校教育の惨害は、いくら言つても切りがないから、もはや教育といふものを學校から引離して考へる外ない。身を切るやうな思ひをして、態々學校に入れて謬まれるトレーニングを受くるよりも、もつと必要に即した人間としての能力を、實際の間から學び、習得する方法をお互に講じなければならぬ。目がくしをされない生れ乍らの、ハツキリした目で觀る時に、ほんとうに社會は大學校なりだ。

二本の腕と二本の足とで、其日／＼の糧を稼ぎ得る動物的弾力を有する體の持主に取つて、學校なんかは誠に贅澤な、そして、餘計な代物だ。學校の中から吐き出さるゝ人間の、指導者として極めて不向なことは、上述の通りだ。

吾々は、吾々同志、農民大衆の間から、我等の「證し人」を求めなくてはならぬ。その外に天降るべき救世主はない。

もしも政府なり地方公廳なりが、農民の爲に指導者を置かうといふならば、その地方地方に土

着する實際農民から之を選むがよい。暖地に生れ、暖地に成長した人間を、一片の辭令で一足飛びに、寒地の農業を指導させやうとするやうな、そんな無茶は止めて貰はなければならぬ。又試験場なんかには置く技師は、どうしても十年位は動かさない方針でなければいけない。二年三年で交迭させ乍ら試験も何も出来たものではあるまい。大體作物の試験にしろ、實際農民にやらしたらどんなに手際よくやるか知れはしない。

故に、いろ／＼な不經濟な機關と、非能率的な役人を置く代りに、農民の組合を組織させて、その組合に充分の補助金をやつて、農民をして自主的に、又營利的に試験なり何なりやらす方がよい。農業は勿論營利事業だから、收支償はぬやうな實驗は、大學とか政府直轄の高踏的試験場に任じて、地方自治體では飽迄も實際農民に直ちに應用できる經營の仕方であればならぬ。

農民程浪費を慎み、綿密な經濟の立て方を日常の生活から如實に強ひられて居るものはあるまい。他の職業にあるものゝ如く、後の僥倖を待みに少しでも放漫なやり方をしたが最後、彼等は終生理め得ない程の大穴を開けるだらう。かうした彼等の生計の緊張した習慣から必然に彼等は凡ての計畫と、經營に對して緊密な經濟の立て方を要求する。故に農業に關する施設經營でも、

彼等をして自主的にやらしたら、決して不經濟なやり方をすまいし、又不生産的な經營もやるまい。必ずや與へられたる經費を最有效に生かして使ふことを工夫するであらう。

農會あたりの經費を調べて見ると、事業費よりも事務費の割合に多いのは不思議な現象だ。農民自身の組合をして、事業をやらしたならば事務費などはホンの一部分で足りるであらう。あんな具合では、事業の爲に要る役人だが、役人の爲に置く煩鎖な形式事業だか、さつぱり見分げがつかないやうなのが現今の實狀だ。

今の時に養成すべく必要なものは、農業の指導者ではない。實に經營者だ、口先きを以て指導する者に非ずして、經營を以て自ら粉骨碎身する者である。もし政府其他の官廳が、一金でも支出すべき公費があるならば、人間や機關の事務費に出さずして、實際の働きそのもの——一の經營主體にこそ出すべきである。

各縣の農事試験場なんか、今迄のやうな贅澤な試験なんか止めて。直接その地方々々の模範農園を實現する積りでやらなければならぬ。多額の經費を、縣及び國庫から支出さして居り乍ら、其存在は殊更實際農民に取つて風馬牛である。

今日純粹の種子又は人造肥料が、農家の手にたやすく得らるゝと否とは、莫大な損益の岐るゝ重大事項であるが、何處に、種子検査や肥料検査を、無料で而も手数をいとはずにやつてくれるやうな農事試験場があるか。大正十三年七月中、資本金一千五百萬圓、農學博士を社長とするラサ島燐礦株式會社の製造品が、肥料として極めて價値の乏しきものであることが發見されたが、之に依つて受けた百姓達の損害は、蓋し莫大の額に上るであらう。こんなことは今頃發見さるゝ迄もない。とつくの昔に發見されて、今頃はそんな不正を働く會社なんか存在し得ない迄に、一國の農業界が發達して居らなければならぬ。

瑞典でも丁抹でも和蘭でも、種子や肥料の検査は、既に數十年前からやられてゐるのである。さういふことこそ農事試験場なんか先ず以て必施すべき事項ではないか。其他土質土性の鑑定、土地改良に關する嚴密なる科學的處方といつたやうなものも、實際に適用して、自信のある結果を農民の前に提供すべきである。

千遍一律的な、御座なりの報告用試験なんかに其日暮らしの勤をやつてゐたり、或は原種固定などゝ及びもつかない大ダサな仕事に手はつけなくもいゝから、普通一般の其地方の百姓が、試

験場のやり方に準據してやつても危險がないといふ信用を得る程度の、實際の成績、模範經營を示す丈で澤山だ。原種固定などといふことは、轉々定めなき浮き草稼業の、地方技師になど出来るわけのものでないから、さういふことは大學の附屬試験場なり、本省直轄の試験場に任かして置くがよい。

充分の豫算を要求し充分の學力を供給され、好適の場所を選定して居り乍ら、實際の百姓の目を聳てしむる程の成績を擧げ得ないのは、其言ひ譯の如何に拘らず、インエフィシエンシイ（無能）の暴露と言つて差支ない。而して此の非能率的原因は、彼等役人達の科學的技術的修練が徹底的でないのも元よりだが、主として、經營者としての實驗的經歷がないのから來てゐるんだ。

彼等は要するに、學校ではホンのプリンスブル（一般原則）しか學ばない。それは單に書物を讀むこと位のものにしか過ぎぬ。薄べらな教科書からカイナデの智識を得た外に、一粒の米も一本の大根も、日常生活の喫緊事として、初めから終りまで、周到な觀察と不斷の勞作を以て作り出した經驗がない。それ程に今の學校といふものが、人間を作る上に粗放極まるやり方をして居

るのだ。苟くも學校を出た曉には、その學び得たことを實地に活かさうとする清新の意氣が、若い者の間に湧かねばならぬ筈だ。そこで死に物狂ひで、實地經營に當らうとするのは、失敗とか成功とかいふことは別として、人間を活かす上に大效がある。斯くして實際經營に當つて充分自信を得た上なら指導者の地位に立つてもいい。さうした實驗の坩堝を通つて來た上なら、百姓達の前に出て、何かしら役に立つことが言へるかも知れない。所が今の指導者の多くは、高い所から演説でもさせて居れば危かたけがなくてすむが、演壇から引下ろして、百姓達と膝つき合はして質問應答したらグウの音も出ないやうな類のもの許りだ。

役人許り作る學校と、學校を出たことの外に修業の履歴を持たぬ指導者とは、國民にとつて有難迷惑だ。「學校はなぜ生産者を作らぬか」なぜ創造者としての生活人たる資格を作ることに努めないか。それこそはホントウに、人間の教育さるべき甲斐あることでなければならぬのに。

同じ産業技師でも、農業のそれと工業のそれとは、その能率の上に於てはくらべものにならない。工業技師は工場の中で、不斷に運轉してゐる機械の中に働いてゐる。それを運轉する爲には、絶えざる研究と工夫とが必要だ。彼等の心には油断がない。そこには、最新の發明發見が費用を

吝まらずに應用される。脂のにじんだ上つ被りを着て、職工の中に伍しつゝ、研究も指導も眞剣にやられる。然るに農業技師のやる仕事は、お天気次第だ。一刻の油断もならぬといふ程に緊張した心構へをする必要もない。よしんば秋になつて減收を見たところで、それが直接自分の俸給に影響するといふわけでもない。工業技師には工場の成績は、テキ面に、そのボーナスに影響するおまけに農業技師には、地位の安定がない。今年寒地に居つても、明年は暖地へやられるかも知れぬ。

一體農業こそ土着的な産業なのに、なぜこれが指導者を轉任させるのだらう。人が變つても済む工業技師が、一會社に何十年も勤続するのに、永續的でなければならぬ農業技師が、轉々して構はないといふのは、何といふ矛盾であらう。農業は氣候と土質の影響を受くること甚大な關係上、どうしても、同じ土地に十年二十年の定住を必要とする。昨日今日轉任して來たところで、自信のある何らの指導が出来るものか。そんな自信は誰だつて持てるものではない。只智識の低級な、何事でもお上と役人に屈從し切つてゐる農民の前に出て、當らすさはらすのことを云つて居れば済むんだがら、あちこち轉任して歩いて、左程困らないで居られるのだらう。これが自

分で責任を負つてやらにやらん生産事業だつたら、仲々オイソレと引き受けられるものではあるまい。こゝの所の呼吸の違ひが、指導者たる役人と、指導される農民との立場の上に、大きなギアツプ(虚隙)を作るのだ。

嘗て我縣に赴任した一山林技師が、大いに吉野杉なるものゝ優良なるを吹聴して、營業者に勧めて態々原産地から、種苗を取り寄せて殖林せしめた。然るに、いくら優秀な種類でも、雪の深い東北に来ては、曲りくねつてトント地杉(在來種)に叶はない。折角子孫の爲にと殖林したのがあべこべに、「親父はどうして、こんな役にも立たぬ種類を好んで植えたものかな。こんなものより地杉でも植えて置いて呉れよばよかつたのに……」と、却て怨みを言はれてゐるやうなテイタラクだ。

どんな取り返しのかぬ失敗を残したにしろ、一度轉任すると、役人の過去は自然消滅となる旅鳥と異名をとつてる位だから、何もかも「旅の恥はかき捨て」でケリがつくから世話はない。それだから、百年の大計を定むべき産業方針などはおろか、十年の計畫だつて、満足に結末をつける例がないのであらう。

いつか新聞で、發明家として表彰された、煙草專賣局の一職工の記事を見た。それは機械の或る部分の操作に於て、女工が度々怪我するのを見て、いろ／＼苦心研究を重ねた後、とう／＼それを防ぐ一機械を發明したと云ふのであつた。かういふ部分的に必要な發明發見は、技師では出來ない。却て毎日その部分に手を觸れてゐる、職工の頭に萌ざして來るといふのが面白いではないか。こんな風に我等の百姓も、年が年中、土と作物とに取組合ひをやつてゐるんだから、キツト陸ツバタにゐる技師達の知らない事實や、技術を發見してゐるに違ひない。さうした發明や工夫が一番大事な、一番役に立つことなんだ。現今米國農家で普く使はれてゐるトラクターなども、技師の設計したまゝでは、どうしても幾多の不便利な點があるのを免れないので、それを實際の仕事にシツクリ合はす改良は、多く百姓自身の手でやられてゐるさうである。此邊の用意が、最も今頃の學校出の指導者達に不足してゐるかと思ふ。そしてそれが、彼等の能率の上に大關係があること勿論だ。

現在のやうな人間の養成法をやつて行くと、日本はいやでもさうでも。結核、國家社會主義でも採用する外に道はなくなるだらう。さうでもしなければ、第一個人々々の能力を、有効に使用



することが出来まい。現在のやうな學校出身の人間では、どうしても、個人企業には向かない。彼等は、到底月給取りの外に行くべき道がなくなつてゐる。個人企業をやつたら、屹度失敗するにきまつてゐる。且、資本主義の成長は、益々個人を壓迫する。よし個人に創意があつても資本がない。資力のないものに個人のイニシエテブ(創意)を生かすことはできない。むべなり、彼等が滔々相率ゐて、國家といふ尨大な機關に寄生せんとすることや。

こうして國家機關許りが膨張して行つたら、了ひには國家社會主義の形を取る外に、人間のやり場がなくなるだらう。そして凡ての産業は、できる丈大規模に、そしてお手のものゝ軍隊式にやられる外なからう。此の軍隊式といふことが、日本では各方面に採用されてゐる。先づ大小の學校がさうだ。工場がさうだ。官僚組織がさうだ。青年團、消防組、ボーイスカウト、すこし大きな團體は、悉く或る意味に於て軍隊式だ。そして軍隊といふもの程個人の自由を束縛する所はない。個人の自由を束縛してゐる所から個人のイニシエテブが生きる筈はない。イニシエテブの自由な發現のない所に、どうして進歩があり得ようか。それはだん／＼に個性の退化を促進する許りだ。現在の官僚階級の能率の低さを見れば、國家社會主義の後の個人の能率は更に／＼低下す

ること火を見るよりも明らかだと言へやう。

兎に角、右のやうにして今の學校といふものが、個々の生産人を造らずして、國家とか、社會とか、自治體とか、凡て大きい組織の使用人を作るやうに出来てゐる。然るに農業文は、いつ迄たつてもチツチャな個人企業だ。だから學校出身者は、悉く今の農業組織には合はない。それなのに、却つて個人企業の農民を指導しやうといふのだ。効果のないのは當り前ではないか。効果がない所か、彼等の指導振りは、益々個人企業を不利に導き、現在の農民が其企業組織を變へない限り、益々引合はなくなる傾向を助長してゐるのである。この——企業組織を變へる——といふこと、此事がこれから、農民の大いに考へなければならぬ緊急事だと思ふ。

他の産業、工業でも商業でも既に十八世紀以來、所謂産業革命の洗禮を受けて、長足の進歩を爲してゐるのに、我が農業に限つて、些かもその企業組織の上に、面目を一新する程の革命を受けて居らぬではないか。こゝは大いに考へなければならぬ點だと思ふ。凡ての方面に於て、大量生産が企圖されてゐる時代に、何故にひとり農業のみが、自然の前にいと弱小な人間の、個々の力のみによつて營まれなければならぬか。何故に最新の科學と最有効の組織とが人類の生存

に眞先に必要な食糧生産業に採用されぬか。株式会社であれ、コオペラティブシステム（産業組合）であれ、はた又コンミュニオン（村落共産體）であれ、どしどし試験して見たらいいではないか。

いつまでも個人經濟の小さい殻の中に、蝸牛の如くちこまつてゐると、しまひには手も足も出なく乾干らびてしまふ許りだ。あらゆる産業の中で、農業こそ一番安定した生活をその従業者に保證しなければならぬのに、今は却つて農業が一番不安な、一番低級な生活をその従業員に強ひてゐるのである。こんなことではいけない。農業はどこまでも、營利的産業として成立たしむべく、あらゆる方面から研究して見なくてはならぬ。そしてどんなことをしても、凡ての産業に行はるゝ發達要素を取入れる工夫をしなければならぬ。

自分はこゝで百尺竿頭更に一步を進めて考ふべき必要を感じる。我々が小作人本位の農業と云ふ事に許り踰踏して、農業それ自身の進歩を顧みないならば、それは大なるヒガ事ではないか。

いかなる犠牲を拂つても、農業それ自身の進歩はどこまでもやらなければならぬ。小作人と云ふものは、社會組織の産物であつて農業固有の附物ではない。農業の不進歩はどの道、小作人とつても決して有利ではないのだから。

農業の進歩の爲には、或場合收支計算を度外にしても押し進めて行かなければならぬ。よりよき食物、より潤澤な供給、それが人類の福祉の増進にあらずして何ぞや。食物を節し、食物を粗にして構はないのは、人類の退化を來す所以だ。食物は實にすべての生物のエネルギー（精力）の源泉ではないか。

希臘、羅馬の盛時に於て、食糧の生産及び調理は、悉く奴隸の仕事であつた。二千年後の今日食糧生産にたづさはるものは、奴隸の状態からいくばくの距離に於て位置し得るとはする。人類に最も必要な生産が、最も非文化的階級の存在に俟たなければならぬと云ふのは、文明の名に於いて耻辱ではないか。

近代のインダストリー（工業）が、長足の進歩を遂げたのは、機械の應用にある。それと技術者の優遇、工場並に研究所其他の設備に金を吝まなかつた點にある。

農業の進歩の爲に、何程の機械が應用されたか、又其の企業組織、生産方法に對して、何程の金が吝まらずに使はれたか。耕作者に對して、誰か高價な機械を買つて使はしたものがあるか。誰か收支計算を度外に於ても最も進歩した經營方法を農業に應用したものがあるか。誰か資力も何にもない小作人に、全然農業は任せ切りで、その上收穫の丸半分をフン取つて居り乍ら尙且、農業の進歩を期待するとは、何たる厚顔、何んたる得手勝手ぞ。

ア、地主よ、封建君主よ、卿等は何故に卿等の依つて以て、衣食し居る農村の爲に、小作人の爲に試験場を作り、農藝工場を興し、進歩せる機械器具を貸與し、更に低利農業銀行を設くる等卿等も亦その力の能ふ限りに於て、農業の協働者たる態度に出でないのであるか。徒らに小作争議の擡頭に怖氣するよりも、一步進んで、農業そのものの進歩の爲に献身するの舉に出ないのか。父祖の餘澤は、歴代の搾取を露骨に物語つてゐる。それは當然、悉く農業そのものゝ進歩の爲に費消することに依つて還元さるべきである。

然し乍ら、私はいかに口を酢くして叫んだ所が、搾取階級たる地主が自ら進んで引合はない農業なんか手に着ける氣づかひはない。地主は土地を小作さして、手を拱いて收穫の分け前を得

ればこそ引合ふが、自ら手を下したんでは、到底引合はないものだ。これは、算盤高い彼等には、分り過ぎる程分り切つてゐる。茲が實に小作人の目のつけ所である。地主は、土地を返還されることを最も恐れる。何となれば自作する氣のない所へ持つてきて、どんなにいゝ田でも、畑でも一々年放擲したら再び元の草の野に化して了ふ。それを再び元の熟田にするには五年三年で出来ない。で、地主はいかに儆誦しても、結局土地返還を最も恐れてゐるのである。只土地返還の場合、他にいくらか小作人を得られるやうな事情があれば何にもならぬから、そこは小作人組合の存在を大に必要とする所以だ。

小作人組合の企業形態としては、土地と生産費は地主に出させ、勞力丈を小作人が出す、一つの會社組織にするのも一法だと思ふ。つまり豊凶に拘らず、小作人の生活丈は、どうしても維持されなければならぬ必要から、その勞賃は確實に支拂はしむる。豊凶に依る損得は、地主丈が之を負擔することとする。地主は生活に伸縮が出来ても、絕對必要限度に立つ小作人には、それが出来ぬ。勞働賃銀が凶作に依つて、フィになるやうな状態では、忽ち彼等の生存が危殆に瀕するのである。故に斯の如き場合、割を良くしてやるべき側は、小作人であつて地主ではない。

現在の如き農業經營の狀態では、小作人は其正當なる勞賃にもつかざる報酬で、地主の爲に働いてゐる事實は、既に各縣に行はれた生産費調査の際に、充分統計の上に立證された。勞働者は何よりも先づ第一に、その生活を維持して行ける丈の勞賃を得なければならぬ。最低賃銀法制定の必要はこゝにある。

然るに、小作人は嚴密に計算すると、殆ど最低生活限度にも足らざる勞賃にしかつかない收穫の配當を受け乍ら、奴隸道德と因襲束縛の下にウヤムヤに暮して居るのである。こんなことでは未來永劫まで彼等の立場の良くなる氣づかひはないのだから、どうしても、もつと收支計算の明瞭な仕組の下に農業を經營することを考へなければならぬ。

茲に於て、地主をして農業を直接經營せしむる必要が生ずる。そして一個の企業として經營して行く實力を有するものは、土地あり、金あり、教育ある地主の外にないのである。

苟くも土地を所有するものは、神の前に人類の前に、その土地を耕すべき儼乎たる義務を負ふべきものである。土地を獨占し乍ら、土地を耕さないで使手してゐるのは、あらゆる意味に於て罪惡である。

昔は百姓と名の附く程の者は、いかに大百姓でも自家に數人の作男を置いて、實際に農業を經營してゐたものだ。故に農業の技術は勿論、その辛苦もその心理にも能く通じてゐて、農業従業者に對して充分の同情を持つてゐた。今日の大地主は全く態度が違ふ。彼等は農業の技術は勿論その收支計算も一切與り知らないのである。今若し實際の收支計算に立脚した小作料決定の問題が生じた時に、現代の地主に果して能くそれに應酬し得る用意と根據を有する者があるか。——到底覺束ないのである。さうすれば、單に法律上の權利を無理に官權に依頼して強制し得るに止まる丈である。——かうして地主小作人間の關係の益々惡化し行くは、當然の傾向ではないか。農業指導者と云ふ職業にありつける大部分の者は、金のかゝる學校といふものに入ることに出来る、地主の子弟と云つていふ。自ら農業を經營せざる地主が、更に其の子弟をして指導者の名の下に、自勞農民の税金に依食させて済ましてゐる。何といふ厚顔であらう。何といふ良心に對しての無恥であらう。地主が其の子弟を農學校に入れることは、自ら農業を營む前提としてこそ初めて意義がある。それ位までに農業に對する態度を眞剣にすることに依つて、土地を獨占する義務の萬分の一が果せると云ふものだ。

試験勉強を骨子とする杜撰極まる學校の學問と、實際經營の苦境を嘗めた經驗のない、非能率的な腕前とで出来上がった農業指導者といふ役目は、もはや冗物過ぎる時代となつた。農業は須らく實際經營を以て指導すべきもので、又實際經營を以て充分指導の實を擧げ得るのだ。苟くも牧益の多い實例を聞けば、彼等農民は千里を遠しとせずして、握り飯持參で見學に出掛けること盡せりだ。肩書附の名刺をふり廻して歩く、コケオドカシの技師などに、高い出張費など給して、町村を巡廻さしたつて何になるものか。それらの指導者の活券は、自勞農民の方で先刻承知だ。

今度の行政整理で失業する官吏は、約四萬人ださうだが、その内何パーセントの人間が能く獨立した生業を爲し得るだらうか？

それらの殆ど悉くが學校出と云つていゝだらうが、教育あるものが、明日からでも食へるだけの働きが出来ないとは、何といふ謬つた教育の犠牲だらう。是等の人々は、中學に五年通ふ代りに大工の弟子に五年を費すことの、いかに有利有能であつたかを、今更痛感しないであらうか。日本人の生活にとつて、可なりの負擔であるべき中學の科程五ヶ年といふものは、アレヤ一體何

の爲の教育だらう。人間の技能から見ても思想から見ても、最も重大な時期を五ヶ年もの間、丸つきり得體の知れぬ無味無効無益な教育に費してゐるではないか。——アンナ馬鹿氣た學校制度は、世界中何處を探ねたつてあらうとも思へぬ。行詰つた日本の國狀にとつて、アレは餘りに非經濟的な代物ではないか。

ひとり中學といはず、すべての學校がさうだ。第一生産人を作るといふことを目指さぬことから凡ての缺陷が來てゐるんだ。人間が生産人たることを覺悟すれば、決して失業を恐るゝことはない。他に寄食する外ないやうな人間のトレーニング(教練)をするものだから、今度のやうな場合に、犠牲がひどくなるのだ。

劃一主義なる下に、全國の學校といふ學校に一々干渉して、些かの獨創的な教育をも許さぬ政府が、アンナ役にも立たぬ教育を國民に強ひて置きながら、一時に四萬人も失業さして恬然としてゐるとは、何といふ冷酷な無責任な仕打ちであらう。

何人も、もはや指導者だの事務員だのといふ他に頼らなければならぬ立場を考へるな。先づ第一に生産者たることを心掛けよ。生産者のみぞ裸になつても強かる。唐人歌ふて曰く、

堀井飲耕地食帝力於我有何乎。

## 地べたから見た農政問題

今の日本で、農業及び農民に関するあらゆる論議が、悉く不徹底で、無効果で、そして非決定的な最大の原因は是れだ。この一事にこそ何人も眼をつけなければならぬ。即ち、ホントーに野良に出て汗を流して稼いでゐる者が、彼等自身の福祉に就いて、根原的に、又積極的に、充分に考へるアタマとヒマを有せぬこと。よし考へても、その考を堂々と世間に発表し得る機会が與へられぬこと。よし意見を發表しても、學者、文人、其他の代辯人の言説ばかり聞きつけてゐる國民は、それら實際の農夫の言を聞くすべを知らず、それに耳を借さうとはしないこと。これだ。これが最大の原因だ。

實際の農夫ほど、端的に彼等の爲に必要な箇々の事實を知つてゐるものは他に一人もない。彼

等は或は原因を知らないことがあるかも知れぬ。けれども結果の悪いことには、現實に痛切に悩んでゐる。彼等は或は救済の策を講ずることを知らぬかもしれない。けれども何らかの應急の策が講じられなければならぬとする眞の必要に迫られた状態にハッキリと目が覺めてゐる。そこから叫ばれる彼等の、第一人者としての叫びが、聽かるべき多くの價値、多くの暗示を含んでゐる筈ではないか。然るにそれが聽かれない。はた叫ばれない。そして机の上、書齋の中、高い壇上から、勿體ぶつた理屈に墮した、實質の空虚な學者、代辯人などの言説のみが囂々として喧しい。見給へ、それらの言説のどれ一つとして、如實に農民の中にあつて、有機的に働き得る可能性のある活きた方策があるかを。農民の爲に些かでも、その足腰を起たしむる爲に、今の今、役立つやうな何らかの活機が含まれてゐるかどうかを。

彼等は口を開けば、農政とか食糧政策とかいふことを揚言する。けれども、それは一體概念を離れて、どれ丈のハッキリした内容實質を有するものであらうか。第一農政などといふ仰々しい文句からして氣にくはない。

農政とは、學校で講義する政治經濟學の一講座として、分擔の便宜上から名前付けること位は

差支えないにしても、今頃、事新しく大ダサに、百姓の頭上に持ち來されるのは、却て迷惑千萬である。ソリヤ封建日本に於ては、國家の政治全體が、主として百姓相手のものだったから、それで農政と言へば、まア國政といふ程の意味にも使はれたらうが、それを、今頃受賣的に農民に持つて來られるのは、そんな名前の下に、封建日本の階性たる抑壓政策を新たに布かんとする下心に非ずして何であらう。近來小作人共が、だんく頭を擡げ出して來たので、それに怖氣がついて、俄かに之が對策を、政治的に求めんとする地主階級の旗印に過ぎないのではないか。果然それは小作人の爲ではなくして、徹頭徹尾地主自身の爲だ。ホントに小作人の福祉の爲に執らるる政策ならば、最初から最終まで、一貫して掲げられなければならない目標がある。それは土地の上に、儼乎として存在する封建制度を崩壊せしむることだ。

封建制度とは何ぞ。

それは土地の兼併である。土地に附屬する權利の壟斷である。

小作人が農奴と選ぶなき状態に於てある事實である。

農業に没交渉なる不在地主の存在である。

米の生産者が、その生産物をシツカリと手元に握つて居らない爲に、市場に於ける價格に對して何等の權威無き事實である。

百姓は生きず死なざる程度に治むべきものといふことの、政治的命令ではないが、經濟的組織に依つて現に行はれてゐる事實である。

貧乏だから人は奴隷の境遇に甘んずる。といふ事と共に、奴隷の境遇に甘んずるが故に貧乏なんだ、といふその相等しき眞理である。

封建制度は、官僚制度と共に主従關係の儼然たる存在を意味する。一方は生殺與奪の權をも有すると自任する封建諸侯の地位、一方は地主の所有土地に依據して、辛うじて口を糊し得る境涯にある奴隷の状態、これがかけ値のない現存の、地主小作人の關係に非ずして何んだ。土地を離れては生活が出来ないと思ひあきらめてゐる小作人、土地はいつでも小作人から引上げられると思ひ極めてゐる地主、そこに封建時代の主従關係が成立つのは當然ではないか。

土地の生産力を増進させる何らの投資も出來ず、勞力さへも充分に供給し得ない小作人に、全

然農業は任かして置いて、土地から上る利益は、土地其ものに還元することはチツトもしないで悉く他の銀行、會社、商店に遊離させてゐる有様でありながら、どうして農業の進歩なんか望まれやうか。どんなチツボケな土地でもが、それを自分のモノとして耕すのと、ヒトのモノとして耕すのでは、第一その心持の上に雲泥の相違がある。然るに土地を耕すものが土地を持たない。そして土地を持てるものが、土地を耕さない。これが自然の前に合理であると言はれ得るか。この不合理からして土地の封建制度は、一方に於て従業者を益々悲惨困窮の境地に追ひやりつゝ、一方に於ては益々不勞利得者をして、坐食頽廢の退化徑路を辿らしめつゝある。ドツチに向いてもいゝことはない。

農業の進歩に對する最大の敵は實に土地の封建制度である。換言すれば地主小作人の制度である。その證據は、既に〳〵世界各國の歴史に於て充分證明されてゐる。この封建制度をどうかするに非ずんば、その國の農業は斷じて進歩しない。故に農政といふならば、それは何よりもこの大目標に向つて一直線に進まねばならぬのだ。

然るにこれに對して、かの農政マ々とエラソウに言ふ連中は、どれだけの具體的方策を有する



か。先づそれからして與かり聞きたい。

自作農創成といふことは、近代文明國の唯一の農政々策であつた。そしてそれに成功したものは榮え、そしてそれに成功しないものは益々衰頹の一路を辿つてゐる。前者の例には彼の丁株がある、和蘭がある、愛蘭がある。後者の例の筆頭に數ふべきものは日本だ。

日本に於ても自作農創成といふことが、朝野の間に唱道されてから久しいものだ。而も一向にその効果あるを聞かぬ。それもその筈、低利資金を鼻糞程農村にふり撒いた丈では、尺寸の土地と雖も、自分のモノとして保持して行くことが六ヶしい。富饒發行の特權を有しながら、勸業銀行あたりの貸附規定の煩鎖にして、且つ依然として高利嚴重なる事と、丁株の百年に亘つてなしくずし得る、加ふるに、年四分といふ低利、おまけに最初の三年間は元利共据置といふのに比較して見る。百年といへば人間三代に跨る年數だ。この位までに寛大な親切味のある取扱ひ方が、日本の何處に認めることが出来やう。

金利の高い點では日本は蓋し世界屈指の地位を占むる光榮を有するであらう。こんな高い利息のつく金を使つたんでは、さらでだに収益の寡少な農業などは到底引合ふものではない。産業組

合にしろ年一割より安い金利は恐らく無からう。農業も又、一の生産業なれば、収益を大にせんが爲には、勿論相當の投資をしなければならぬ。所が斯る高利の金ではテンデ資本を使ふことができないのである。聊かの補助をして小作人に土地を買はせることなどは、頭から馬鹿氣切つた算段ではないか。食ふことさへも六ヶしいものが、どうして利子を拂へるか。のみならず現代のやうな經濟組織の中にあつては、僅か許りの土地を所有すると否とは、必ずしも農業を引立てる上に就いて大した問題とはならない。多寡の知れた土地所有が農業を際立つて有利にし得るならば何故に彼の中農といふものが頻々として没落するのか。中農の維持して行けない現状が、實に自作農創成の無効を明晰に物語つてゐるものではないか。

區々たる五反や一町土地を持たしたところが、それに依つて農家の生計は安定されるものではない。のみならず、農業と云ふものが今迄のやうに、各戸別に孤立して營まれる間は、到底他の盛衰なる産業に追従して行けるものではない。現在の農家に必要なものは、土地よりも資金である。尺寸の土地でも買ふ丈の餘裕があるならば、それを以てよき種子を買ひ、よき農具を買ひよき肥料を買ふ方がどんなに有利だか知れやしない。小作人に土地を持たしたら、名義丈は小作

人で無くなるかも知れないが、経済的には少しも小作人の域を脱し得られぬ。否却つて小作人よりも苦しい立場に居らなければならなくなるだらう。何となれば彼等は土地購入の元金の外に、更に利子まで加算して支拂はなければならぬから。

「農民」と「土地」とは離るべからざる関係にある。農民の土地に対する執着は遺傳的と言つてもいい。だがそれは必ずしも所有慾から許りではない。むしろ所有権者たる地主の横暴が、餘りに屢々土地の使用権を無視するからである。立毛の差押へ、小作権の没收、小作人の勝手な交替、それらに依つて小作人が使用権に不安を嘗めさせられた結果、どうしても土地丈は自分のモノでなければならぬと思ひきめるに至つたのである。

けれども土地を所有するなどといふ大ソレた慾望は、食ふことにさへ餘裕なきものにとつて、金輪際不可能なことが分り切つてゐるではないか。出来ない事をサモ出来さうにおだてられて、夜の目も合はさずヤミクモにカセグことは、決して自分等の地位をよりよくする最善の方法でも何でもないんだ。だから只カセグ許りが能ぢや無い。チツタあ考へよといふのだ。

土地は一の生産機關として必要な丈だ。その外の何物でもない。遊んでゐる土地は一文のネウ

チも無いぢやないか。その上に働く者があつて、初めてネウチが出て来るんだ。されば土地の使用権さへ確立されたら、従つて、單なる所有権が無限の權力に非ざることが明瞭になつたならば、土地は必ずしも所有しなければならぬといふことはない。國民經濟から云つても、土地そのものの價値から云つても、所有権よりも使用権の方がより大事なのだ。

然し乍ら所有権に制限を加へるといふことは、所有権者に依つて支持さるる政府者には望まれない。さうかと云つて使用権者の個人々々では、到底力強くそれを主張することが出来ないのだから、其處に何かしらの使用権を確實にする一つの力を樹立しなければならぬ。それさへ樹立し得られたら、何も苦しい算段をしていゝが借金までして、僅かづつの土地を所有するの必要がなくなるわけだ。

一體自作農創成などと云ふことは、例に依つて役人達が調査袋の中の、西洋、殊に英國あたりのスモール、ホールディングの焼直しに過ぎなからうが、西洋でも既に効果の無いのに呆れてゐるんだ。のみならず、西洋では土地を持たずよりも、土地を持つてから後の維持經營に、最も意を注いで居るんだ。日本はさうぢやない。只鼻ソク程の金を融通する丈で、後は野となれ山となれ

だ。

總じて自作農創成などは、農業の有利に行はるる國の外甘く行くものでない。丁抹などは英國といふ大市場を控へ、其上組合組織が至れり盡せり、充分農業が有利に經營出来るんだから自作農創成も出来るのだが、日本とよく事情の似てゐる英國などではサツパリ駄目なんだ。日本に於ての急務は、小作人をなくする爲に土地を持たすことではない。

農業を有利にするといふことが一番大事なのだ。農業の薄利だといふことが一切の病根なんだ。

然るにその薄利なものに依據して、働かぬものと、働くものが等分の分け前を取つて食つて行かねばならぬ。一方が食へれば一方が食へなくなるにきまつてゐる。その爲に両方が苦しむのは當然ではないか。

土地から上るものには限りがある。小作人を生かさんとすれば、彼等の分け前を増してやるより外に道がない。その爲に地主が食へなくなつたら、自ら進んで農業を替むなり、他に轉業するなり勝手に出来るではないか。

一國農業を厚利にする爲に、地主が如何なることを爲したか。又爲しつゝあるか。農業に対する地主の貢献といふものはそも幾何なるか。自ら農業を営まざる彼等に、農業經營上の何等の貢献をも望まれないのは勿論だが、他に市場なり、金融機關なり、教化方面なりに何等か貢献する所があつたであらうか。小作人は農業を厚利にしようたつて、第一資本がない。ヒマがない。頭がない。その出来る地主がそれをやらないで、拱手傍觀し乍ら、只管農業から、より多く搾取することを心掛けてゐる。代議士となつて口先許りの農村振興を叫ぶ位が關の山だ。農村振興を叫ぶ者は大抵農村の寄生階級だから嫌になる。

もし政府が農業を保護しようとならば、當然農業の經營者、即ち小作人を保護すべきである。小作人の疲弊は御座に農業の衰頹に結果する。然るに地主丈を眼中に置て、若しくは地主階級の傀儡でしかないやうな政府では、とても小作人の困窮に就いて積極的な政策を執れやう筈がない。直轄小作人による効果を齎らすやうな政策でない限り、到底農業を振興さすことなんか出来はしない。ミルクを多く出させんとすれば、乳牛の營養こそよくしなければならぬ。搾乳者の營養をよくしてもミルクは餘計に出ない。

一體政府は保護すべき産業と、然らざるものとを區別する上に於て、飛んでもない錯誤をやつてゐる場合が多い。吾々は、天然資源の有限無限をハッキリと區別して置く必要がある。有限なものは保護しなければならぬ。

自然より奪ひ取つたものは、何らかの形で自然に補償しなければならぬ。鑛山業などは自然から奪ひ放しで、少しも之に酬ゆるといふことはないが、農業こそは奪つた丈のものは之を補ひ還すことに努めてゐる。鑛業は限りある天然資源であるから、政府といふやうな強権者は、當然その強権を善用して、國營なり何なりの形に於て、其發掘に制限を附すべきものである。然るに之を私人の飽くなき貪慾に任して構はない。而も自然のものを最も經濟的に使用してゐる農業に對しては、重税(その収益から見て)を課し、投機を許し、あらゆる不勞利得者の搾取を默認してゐる。こんな不公平な不用意なやり方で、農業者のよりよくなる見込はあるものか。保護すべきは汽船會社ではない。製鐵工業ではない。他人の土地の上に自ら勞作する農業者である。何故に地租の累進税を起し、同時に免稅點を定めぬか。何故に不當利得と勞働利得とにけぢめを附けないか。下らぬことには、コセ／＼した、重箱の隅をほじくるやうな煩瑣な規定を設けてゐる癖

に、肝腎のことには手も足も出ないのが笑可しい。

開墾助成法などは速かに廢止するがよい。今頃開墾でもしようといふ者は、餘裕綽々たる地主しか出來ない藝當だ。そしてその開墾をほんたうの熟田にするものは、悉く小作人の勞力に外ならない。骨の一倍折れる開墾に、交通の不便な。生活の粗末な場所で艱難を嘗め乍ら、結局は地主の得にしかならないのが開墾事業といふもんだ。そんな事業に補助するよりも、國がいらぬ土地、拂下げすべき土地があるならば、ウムを言はず自ら勞作しようとするものに只で呉れてやるがよい。手続きとか何とか六ヶしいこと許り言つて、いつも地方の職業政治家や、大地主に許り拂下げてるくせに、開墾助成も何もあつたもんぢや無からう。

日本の國土にはまだ、遊んでゐる土地はザラにある。又無暗に繩張りを廣くして、ワザと廣大な地土を遊ばして置く不心得者もある、是等の土地を片ツ端しから自ら勞作して食はうといふものには只で呉れてやるがよい。荒地は決して只で耕地にはならない。荒地を耕地にする丈の勞力で、荒地の價は充分はれてゐる。借金をして土地を買はして、自作農とやらを創成するよりも、此方がどんなに確實に效果の上る方法だか知れやしない。兎に角荒地が耕地になることは結

屬國家の利得だ。地主の権利の埒内に遊ばして置いたつて何んにもならぬ。加之、自ら「働ける者は誰でも土地を持てる」といふことは、國民の精神作興の上に大効果がある。机の上で思想番導なんか考へるよりは、どんなに利目があるか分らぬ。

遊んでゐる土地を、國民の前に新に提供せよ。權利てふ無形の鎖に繋がれて、その固有の能力を發揮し得ずに呻吟してゐる土地を解放せよ。俸給は入らず、勞賃は絶えても、食ふものをチカに作ることに依つて、人間は未だ食ひ得る道がある。働かうとするものに土地をやつたつて損をするものは誰か？ それは決して國家ではないことが確かだ。

「働ける者は誰でも食へるんだ」といふことに依つて得をするものは誰か？ それは國家である。そして國民である。

## 洋農と和農

牛乳といふものは、西洋の農業の生命であり、西洋人の生命である。

西洋人は三度の食事の只の一度だつて、否、三度の食事は愚か、食事といふ食事には、只の一度だつて牛乳の厄介にならぬことはない。西洋人から牛乳を奪つたら只死あるのみだ。それは日本人から米を奪つたのに比較されたものではない。

牛乳は、實に西洋の農業の根幹を成すものであることは之を以ても分るだらう。實に牛乳一つに對する考察は、西洋の農業全般の考察となり得るのだ。

牛乳といふものは、いかに西洋人によいことをしたものであらう。彼等はアノ爲にどれ程喜んだものか測り知れない。

調理が要らぬ、火が要らぬ、おカヅも要らぬ。日本酒のやうに飲むと喧嘩がしたかつたり、女

が欲しかつたりしない。バター、チーズにすると長く貯蔵が出来る外に、いつでも取り出して、何の手数もかゝらず直ぐ食へる。女も子供も年寄りも、みんなが同じ程度に飲める。そして飲むと腹がクチくなる。何等の副食物を取らなくとも、完全な營養となり得る。それから。それから。

それに比べて、ツイ近年まで死ぬやうな病人ででもなければ、牛の乳は飲むもんでないと思つてゐた國民のことを思つて見ると氣が遠くなりさうだ。

ナンニシテモ、彼此の農業は開闢の事實からして違つてゐる。大洪水の時、ノアはその箱舟の中に家族と共に數々の家畜を取入れることを忘れなかつた。

然るに日本の開祖は、瓊々岐尊に宣して曰く、「高天原の瑞穂國は五穀豐饒なり、汝往きて之を治めよ」と。

即ち、西洋の農業が家畜に依つて立ち、日本の農業が穀作に依つて立つものである。この根本の相違は、開闢以來何千年間に亘つて、系統的に彼我の相違として持續してゐる許りではない、深

く、民族心理にまで抜くべからざる影響を及ぼしてゐるのだ。

西洋人は子供の時から家畜には親炙してゐる。従つて女子供でも其取扱ひには慣れてゐる。

日本はさうは行かない。子供の時から家畜を怖がり、一向其取扱ひに慣れて居らぬ。角のない馬だつて怖がつてゐるではないか。

同じ家畜でも、馬と牛とではそれに對する感じは違ふ。馬は只勞役を供するに過ぎないが、牛は人間の生命に資する日常無くてならぬ食料を毎日供給してくれるのだ。それに對する感じと、従つて取扱ひ方の違ふのは當然ではないか。そして此の牛を大事にする心持から、其他の家畜、豚にも羊にも鶏にも、よき心掛と親しみとが押及んでゐる。

延びては、衣食住の全般に亘つて劇然たる相違を持ち來さずにゐない、例へば、毛織物の風雨にもメゲヌ實用耐久性と、綿布の汚れ易く切れ易く、風雨に一タマリもない點だけでも比較にならない。下駄や草鞋の代りに牛皮で造る靴といふものもある。

家の構造も靴を穿くことから違つて來たのではないか。靴を穿くと一々脱ぐのが億劫だから、

どうしても靴のまゝで出入りして差支へないやうな家にしなければなるまい。又、靴でドシンドシン歩く爲めには、木と紙の構へでなしに、もつと堅牢な煉瓦とか石とか使はねばならなくなる。

此の家といふモノが、どんなに西洋の文化と日本の文化とを隔たらしめたことか。

日本に於ける生活改善は、先づ第一に家の改善から始められなければならぬ。臺所の改良とか座敷の間取りとか、其他區々たる文化施設なんか抑も末だ。根本は靴のまゝで、又は泥足のまゝで自由自在に家の内外を歩けるやうに改造することだ。外へ出るのに一々用意と氣構へとをしなければならぬやうな億劫な生活様式が一番いけない。引込思案、怠惰、不善、みんな家の構造から來てゐるのだ。

同じ東洋でも朝鮮や支那では、西洋と同じやうに靴のまゝで自由に出入りが出来るのに、なぜ日本文こんな不都合な億劫な家の構造を何千年の間續けて、少しも不便とはしなかつたのだらう。

着物でもさうだ。支那でも朝鮮でも、遙かに日本の服装よりは身輕で仕事に都合のよいやうに

出來てゐるのに、日本文はまるで違ふ。そんなら日本の氣候風土が特別の恩恵があるのかと言へばさうでもない。東北でも關西でも、服装には違ひのない所を見れば、氣候風土がかうした不便な服装を發達させたとも思へない。

兎に角、その服装にしたところが、家の構造の爲にオイソレと便利な様式に變へられないのだから、家の改造がどうしても根本に來なくては駄目だ。

衣と住に及ぼした影響は如上の如しだが、更に、食の上に家畜がどんな役目を爲したかは、もはや言ふ必要はあるまい。西洋人の偉大なる體格は、主として家畜の賜だと言つて差支へない。殊に最初に擧げられた牛乳の効力は、今更繰り返す必要はなからう。

智識や技術の比較にしろ、畜産は穀作よりも高級だと言つていい。穀作は祖先傳來のままのやり方で、兎も角やつてゆけるので、その爲に習慣を墨守し、進歩が遅いのを免れない。家畜は生き物で且つ高價なものだから、寸時も油斷なく注意を拂はなくちやならぬ。

畜産は何といつても厚利だ。

穀作はそれに比べると薄利だ。

だから、家畜なら投資しても回収が早い。一年に一疋の仔を産む。二年経つと親と子の區別がつかぬ。

穀作はさうは行かない。田一反買ふ金は何年かかつて辨償されることか。

低利資金を融通して、自作農創成とかをなす名案の提出者は、此點にハッキリ目をつけなければウソだ。年賦償還金と利子とは、田の收穫から飯米を差引いた残りから割り出さなくちやならぬが、飯米を差引いた残りに何が残るか。西洋に行はるゝ「スモール・ホールディング」の焼直しは仲々オインレと日本の實情には適しないのデナ。

西洋の農業の根幹をなすものは家畜、殊に牛だ。

日本の農業の根幹をなすものは米穀、印ち田だ。

そこでこんな想像も浮ぶ。――

假りに、西洋で家畜が悉く地主のもので、之を飼ふ小作人はホンの勞賃にも足りない歩合しか得られないとなつたらどうだらう。

主穀農たる日本に於て、生産費は小作人持ちで、收穫の半分以上も地主に取られるのは、西洋で乳牛を悉く地主に依つて占有され、之を飼ふ小作人は、ホンの賣れ残りの乳で露命を繋いでゐるやうなものではなからうか。

然し、日本の農業に畜産を入れ得る餘地と、その必要とは充分にある。

日本に於ては、田にも畑にもなれない土地は、植林の外全然顧られない。――で、日本には植林のないテーブル、ランド、――茫漠たる台地が所在にある。高山とその麓の村里との間は、悉くかうした不毛の台地だ。それは軍隊の大規模な演習以外に、殆ど利用されてゐない。何といふ勿體ないことだ。この土地の狭小な島國に於てよ！

これらの廣い台地は、きまつて瘦地だ。で、先づその土を肥やすことから初められねばならぬ。それには先づ以て畜産が一番着手し易い。どんな瘦地にだつて草だけは生える。よしんば飼料價の低い雜草でもが。それに依つて兎に角、山羊なり綿羊なり肉牛なり飼へる。そこに人間が生活のたつきにとつ付き得る。それからだん／＼動物の肥料で土地が肥やされてゆく。土地が肥えると、その上に花も咲けば實も結ぶ。



蝗と蜂蜜で命をつなぎ乍ら、野に叫んだ人もあつた。

雨量の多い土地は草生えがいゝ。草が何遍でも刈られる。稻も原始には草に過ぎなかつた。草に依つて、人間が生きる工夫がこれからの日本で大いに必要だ。

丁抹は主穀農を畜産農に換へた。それは然し、英國といふ大市場を控へてゐる爲でもある。日本は市場を外に求めるまでもない、国内消費に足りないで、畜産製品の輸入額は文化生活の比例となつてゐる有様だ。

そして、穀作の出来ない土地はザラに遊んでゐる。遊んでゐる土地で畜産がやれる工夫をせよと言ふことさ。

畜産に依つて、總體的に國民の保健、とりわけ粗末極まる農家の食卓が、どんなに優良なものになる得るかは、蓋し想像の外だ。

## 集約農法

私の心は、今、インテンシブ、カルチュア——集約農法——といふことに、しつかりと占められて居る。農業の極致は此外にない。日本の農業も亦當然これを目指して進む外ないと固く信じて居る。

日本の農業はあまりに小地區であるから引合はない。もつと耕地を廣くしなければならぬ。かうした議論を度々耳にする。日本のやうな狭少な地域で、異常に稠密な人口を持ち乍ら、農家各戸の耕地をもつと殖やすなどいふことは頭からテンデ出来ない相談だから、それは反駁するがものでもないやうなものゝ、大體耕地を廣げるといふことは農業そのものゝ發達から言つても、決して望ましいことでも何でもない。

なるほど、耕地を廣げたら概算的には生産も増すであらう。けれ共耕地を廣げるといふことは

必然に生産費を増すことになる。勞力、肥料、地代——總じて生産費がそれ丈増されるのだ。生産費を減ずるといふことが凡ての産業に強制的に要求されてゐる現代に於て、徒らに耕作面積許り廣くしてどうするのだ。第一それに要する勞力をどこから持つて來る。勞力を補ふ機械をどうして入れるんだ。

のみならず、耕地を廣げると當然耕作が粗笨になり、反當りの收穫量が却つて減ずる傾向あるを奈何せん。

投げ放しで生える牧場の草のやうなものだつたら、土地を廣げる程利益かも知れまいが、栽培さるゝ作物は手をかければかける程、それ丈收穫を増して來るのである。近頃は牧場にだつて灌漑をして年に二度刈る所は三度も四度も刈れるやうにしてゐる例は、丁秣や伊太利や米國などに行はれてゐる。米國のやうに土地の有り餘る所でさへ、永代牧場パステューラよりもソイリングクラブ——刈草圃場——に重きを置くやうになつてきた。

日本の農家に取つて耕作土地をもつと廣げるなどといふことはあまり考へなくともいふ。それよりもいかにして與へられたる土地から最大最多の收穫を擧ぐべきかが、そして又金で換算して

の最大の純益を擧ぐべきかが、絶えず攻究されるべき問題である。

單に最大の收量を擧ぐる丈ではいけない。金になる作物の栽培が必要なのだ。どうせ凡ての生産物は之を金にして然る後に農家の生計を助けることになる。廉いものをいくら多く作つても今の世には引合ふものでない。農家の懐から出て行くものは悉く金だ。そしてその金の不足に彼等は年が來中苦んでゐる。物を作つて却つて損をするといふへまな現象がよく農家の間に目撃させられることだ。

かうした金になる作物の選定とか、小地積から最大の生産を擧ぐるといふやうなことは、言ふ程に然く容易な問題ぢやない。従つてそれは只勤勞一點張りの農家のよくする所ではない。それは手の問題といふよりも、より多く頭の問題である。近代の農民の能率とは彼等の勞働力のことよりも、むしろその頭の働きにあるといはなければならぬ。

農業は商工業のやうに仲々オインソレと臨機應變の處置は出來ぬ。どんなにアセツテも勤くとも一年年丈はどうにもその作物を變へるワケに行かない。而も今年値のよかつた作物が必ずしも明年値のいい作物とままつてゐない。相場の変動は實に甚しい。それを洞察して作物を轉換して行

くとは伸々普通の頭では出来ない藝當だ。が、時勢は最早それ位の練達をも絶えず農民に要求するやうになつて来た。現に和蘭の農民は隣國の大都市、例へば、巴里、伯林、倫敦、ブラッセルなどと、電信電話の交換をして相場の變動に依つて品物の發送地をふり變へ、且つ年々作物を取り換へて、只管市場の需要に應ずる工夫を勵んでゐるのである。勿論、それが爲には組合も必要だし、堪能な支配人も必要なのだが、兎に角それ迄にも農業といふものが、敏活な頭の働きを要するやうになつてゐるのである。然るに我國の農民階級に、市場のことをそれ程迄に鋭く目を付けて居るものがあるか。又それが出来るかどうか。それらの畑のこともこれからは立入つて考へて置かねばならなくなつた。

集約農法は大部分技術に依つべきものではあるが、その技術は頭の働きから來なければならぬ。單なる手の先許りの技術は、固定して進歩がない。のみならず頭の指導は、多くの無駄、即ち不經濟を省くことにもなる。

日本に於て、農民の頭と手の修練がどの様にやられてゐるであらうか。自ら勞作してゐる農民に頭の開發——それは當然科學的修養から出發しなければならぬのだが——それがどんな風に行

はれてゐるであらうか。一體そんな修養をなす下地と時間と便宜とが與へられてゐるであらうか。

生れ落ちるからの百姓なら、成程力は強いであらう。人が一反うなう所を一反五畝もうなう屈強の若物も居るには居るだらう。けれ共それはそれ丈のものだ。それは新しい意味の能率などと言はるべきものではない。馬ならば他の一駄背負ふところを一駄半も背負ふものは大いに能率の高い馬だらうが、それと貨物自動車の能率とは比較さるべく類を異にしてゐる。他人が一反歩から米二石上げるところを、三石も四石も上げるといふので初めて能率の高い農家と言ふことが出来る。

學者といふものは厄介なものである。嘗て收穫遞減法なるものが大分日本の受賣り學者の間にも八ケましく論じられたことがあつた。なるほど放任主義の農業ならば限りある地力で收穫も遞減するであらう。けれ共人間の智慧は地から奪つた丈のものを再び補給することを知つてゐる。地力は遞減どころか却つて遞増することも出来るのである。人造肥料の發達、電氣、蒸氣の應用は前人の夢想だもしなかつた偉大なる効果を農業界にもたらしてゐるではないか。

集約農法の根本原則は、土壤と氣候の人為的變化にあると言つてもいい。私は茲でふと自然の征服といふ文句を思ひ浮べたが、故意にそれを押除けた。我々百姓に取つて、否いかなる人間にだつて自然の征服などといふことは言へたものではない。征服に非ずして模倣でしかない。故に自然に對する謙虛なる理解が、人間の絶えず取るべき態度である。人間の爲し得ることは自然を正當に理解して、そしてその近似値に於て模倣することではない。

しかし、土壤及び氣候の前にもつともつと思ひを致すべき重大事があつた。それは――

第一に種子の精選！ア、この事はいくら強調しても強調し切れない氣がする。何は措いても是丈は眞先に不可欠に注意しなければならぬのに、どうも日本に於ては輕々しく取扱はれてゐる傾がある。見よ、かの町の店頭にある雜駁極りなき種子を。多年カタログを送つてくる種苗會社から直接取る種子にさへ異物混交がザラにある。而も誰もサツパリ發芽歩合を檢査しないからよいやうなもの、一々發芽歩合を檢査でもしようものなら呆れ返つた成績を見るだらう。

種子が弱かつたら、どんなに肥料をやつてもダメなことはこれ迄の百姓生活でツク／＼嘗めつくした。種子が弱かつたら、當然それから出るも芽弱い。病氣に負ける、虫に負ける、風に負け

る、雨に負ける、いくら人の力で庇つてやつても切りがない。そして結局ロクな收穫をもたらさない。實に第一步の種子をおろそかにした爲に、人間は後々どれ丈浪費を餘儀なくされてゐるか測り知れないのである。そして人間の發育にだつて此の原則が當籤らぬか？

種子に就いて考へる毎に瑞典のスワロフ試験場を思はぬことがない。ア、何と羨ましいインスピリチュウション(施設)であるヨ。

農業に於ては、土壤と氣候が、自然的に恵まれた状態にあれば、いはゆる天恵の土地であるが然らざるものは人工を加へて、出来る丈天恵の地に近似する状態にあらしめなければならぬ。即ち土壤に對しては灌溉、排水の完備、肥料の選擇、耕耘の精粗等、手を込めてやればやる程限りなく綿密にやれる餘地がある。

嘗て、英國の農民達が巴里郊外の園藝の進歩に驚嘆の餘り、只見聞した丈ではいかんといふので、みんなで金を出し合つて態々一人の熟練した農夫を雇ふて來て模範的にやらしめたことがある。すると物珍らしさに毎日のやうに遠近の農夫達が參觀にやつてくる。そして何やかや質問するのであるが、肝腎の本人は英語を片言も喋れないものだから、その爲に時間を潰すこともな

くて済んだ。さういふ時に、彼は自分の穿いてゐる黒光りのするスポンを叩いて見せて、「先づ何よりも土の色をこの様にしろ。」といふ意味を通はせたさうだ。

巴里郊外の園藝家は、事實、「土を作る」んださうだ。その證據には彼等が地主との小作契約書には、他に移轉する必要に迫られた時は、今まで丹青して拵へ上げた作土と一緒に持つて行くといふ一項を挿入する例になつてゐるのでも分る。彼等は、肥料や腐蝕物の混交に依つて土の色も成分も全く變へて了ふのである。かうして年一年と土が肥えて行くのである。

更に氣候に對して如何なる方法が講じられてゐるか。先づ第一に早春の寒い風を防ぐ爲に、防風林や塙壁を繞らす位な普通なことには満足せず、コンクリートか練瓦で完全なそして永久的な外圍ひを設けてゐるのである。温床、温室、は日本などに於ける如く特種な贅澤なものではなくザラにある。英佛海峡にある群島、ゼルシー及びゲルンジイ島などに於ては、何反歩といふ大地積が温室に依つて圍まれ、その中に馬鈴薯やトマトや草花などが大規模に栽培されてゐる。それは氣候と土壤とを人為的に調節して、季節に先じた所謂「走りもの」で非常な高價を獲得して

ゐるのである。

是等の島は小農者の樂園と言はれる程で、五十エーカー以上の農家は六七しかない。大部分は一エーカー以下の小農である。ゼルシー島は有名なゼルシー乳牛の本場であり、ゲルンジイ島は一番乳の濃厚なゲルンジイ乳牛の本場である。ゼルシー島の如きは、英國の最小の郡のその又三分の一しかない程の小さな島ではあるが、走り馬鈴薯で年五十萬磅を越す産額を擧げ、その上年々英本國、丁抹、米國等に各一千頭位の種牛を輸出してゐるのである。

ゼルシー島は南面した緩傾斜を持つて居り、晩霜の害は尠いが、ゲルンジイ島は北面した傾斜を持ち、より多く霜害を受けるので、その爲に温室は前者よりも遙かに多い。英佛海峡を通る船の上から此島を眺めると、恰もサファイアの海の上に、ダイヤモンドの頸飾でも置いたやうだと言はれてゐる。

氣候の緩和と地味の好適と、加ふるに海岸から綠肥になる海藻の澤山取れるのと、それらの天恵の爲に此處の地代は法外に高い。一エーカーの地代が平均十磅、高いのになると三十磅に上るものさへある。それに組合組織の販賣機關が未だ出來てゐない爲に、徒らに鐵道會社や、仲買商

人の爲に甘い汁を吸はれてゐるので、此處の農民は見かけ程業ではないさうだ。而し乍ら集約農法としての發達は實に素晴らしいものである。

更に、和蘭は海を一步々埋め立てて土地を造つてゐる程の國であるから、國內の農業は極度に集約的に經營されて居る。私は、日本の農業の師としては丁抹などよりも和蘭がふさはしいと確信してゐる者であるが、それは他日一書を成してもいゝ程に心掛けてゐるので、今は一々擧げることが控へて置く。只和蘭といふ國は地圖の上にもこそ小さいが、其國力の充實と文化程度とは、第一等國に列して少しも遜色がないこと文をことはつて置くに止める。殊に日本とは一番早くから貿易してゐるから、ベルリ以來の米國化よりもより多く學ぶべきものがあらう。

白耳義も亦徹底的な集約農法の國である。斯國の養鶏業は代表的に集約農法の一典型と稱しても過言ではない。元來斯國は昔から養鶏の盛んな所で、首都ブルツセルは「食鶏者の市」といふ綽名を取つた位である。斯國に於ける鶏舎は宛然たる小工場の觀がある。年中通じて間断なく、食用鶏を自國の市場は勿論、巴里、倫敦、伯林等の大都市に迄供給してゐるのである。一月で年に何萬、何十萬といふ肉用鶏を出すところがザラにある。

總じて、そのやり方は悉く緻密周到な科學に準據したもので、日常の作業の細部に迄よく最新の進歩した方法が適用され、小地積に人手を節して出来る丈多大の生産を擧げることゝ努めてゐる。科學といふものが教室の中でのみ權威あるものではなく、これ程迄に日常の實際に適用して隠りないものであるか、といふ事の證據には誠に持つて來いの好例である。この白耳義に於ける養鶏法に就いても何れ纏つた一冊の本を出す計畫であるから詳しい事はその時に譲ります。

平地といふものゝ極めて少い瑞西の農業も亦學ぶべき多くのものを所有してゐるに違ひないと思つてゐますが、未だ恰好の本を手に入れないので遺憾です。斯國から出るチーズは世界第一等の聲價を博してゐますし、峻険なアルプス山系に屬する山の斜面などが、絨氈を敷いたやうな緑りの牧草に覆はれ、そこに鈴をつけた山羊や、それから綿羊、乳牛の群が至るところ漫遊客の目を樂しましめ、又その農業上手に感心させてゐるさうです。氾濫し易い河の沿岸には石やコンクリートの堤防を築いて水害を防ぎ、川縁りの肥沃なる土壤を愛惜してゐるさうです。

これらの小國の農業には、調べれば調べる程、ムダのない、ソツのない、津々として盡きざる

滋味があるやうな氣がします。

「農場、工場、家内工業」と題する本がクロボトキン翁の著書の中にありますが、これには性來農業好きの翁が多年に亘つて蒐集した各國の農業に関する事例を澤山列べてあります。翁の著書には大分方々に食糧問題に関する意見が出てくるが、そこには深い／＼思想上の思柢を置いてゐるやうに思はれます。食糧問題の解決を一切の前に來らざるべからずとする程の立前です。従つて農業に對する熱心と趣味は大したもので、至る所の亡命の假寓にも、猫の額程の空地がある、そこに何かしら作物の種子を蒔いた。一番長かつた里昂の監獄では農業に関する様々の實驗を行つたと傳へられる。單なる學說や原理の討究に耽るのではなく、アノ天稟の科學者としての豊富な精緻な頭を持つて來て、生ける人間の生活に不可欠に必要喫緊な食糧問題に傾倒した彼の翁の用意周到な態度には誠に敬服の外ありません。

ロンドンの場末に假寓してゐた時でも、家のまはりに少し許りの野菜と數株の葡萄を植えることを忘れなかつた。家の南側に型許りの硝子室さへ拵へた、或る時親友のエリゼ・ルクリュウが、

自身の創設したブルツセルの自由大學の生徒を連れて見學にやつて來た時に、彼の寓居を訪れた。その時、彼は自分のウチで出來たんだといふことに特別の誇りと親味を表はし乍ら葡萄や野菜を御馳走して、主客共に相恰を崩して悦に入つたさうです。

ク翁の前記「農場、工場、家内工業」といふ本は、農村の活路に對していろ／＼な示唆を與ふるのみならず立派な一冊の教育書です。私は何々主義者として片付けられて、こうした本が自由に萬人に讀まれないことを大へんな損失だと思ひます。

## 農業の共同經營

### カマドのまぢまぢ

「小作人は一の企業家だ。労働者ではない。」

これが政府の當路者、御用農政學者、それ自身地主たる地方政治家、識者と稱する有閑知識階級から、小作人が頂戴した有難くもない折紙である。成る程企業家といへば企業家とも言へやうけれ共この企業家は、肝腎の資本を持たない、土地を持たない、最新の科學的知識を持たない、更に自分等の生産物に對する絶對の握力を有さない。赤手空拳の企業家だ。ナント憫れ果敢なき企業家ではあるよ。

企業家としては先づ何よりも資本が無ければならぬ筈だ。所が小作人に何の資本があるか。土地は暫く別問題として、尠くとも、肥料を買ひ、新しい農具を買ひ、家畜を買ひ、優良な種子を

買ふ位の資本が第一に必要なぢやないか。それが小作人に出来さへしたらなア——

實に、百姓のカマド程マチマチなるはない。田舎へ行くと城廓のやうな封建地主の邸宅を除いて、他は似たりよつたりの茅屋の不秩序な羅列を見るのみだが、その内部のクリマワシは千差萬別、底には底があり、程度の複雑な事切りも限りもない。これらを一樣に見て、かの官選指導者が指導する外ない。これが實に學校に於ける劃一教育の一齊教授に比すべき不合理な大ベラボウの指導法なんである。農家各戸の經濟能力が程度に不同なのへ持つて来て、何處へ標準を置くといふこともなく、只漫然と劃一的指導を爲すといふ事は、效果なんぞ度外視した義務一週の指導しか出来ツこないに極つてゐる。勿論、月に何回とか、年に何回とか役場所在地に巡回して來て旅費製造の機會とする位のことでは効果ある指導も何も出来るものでない事はきまり切つてゐるんだが、それよりも何よりも農家各戸の經濟程度の差別を無視したる劃一的指導が基礎的にいけないのである。

さればとて、この各戸の經濟能力を平均することは出来ない相談だし、又指導者をして一々の農家の經濟能力に應じて指導するといふことも今のまゝでは望まれない相談だ。



そこでどうしたらいいか。こゝが差當つてのト相談。

### 技術のまぢまぢ

技術だつてさうだ。實際に立入つて觀察すると百姓位上手ヘタの甚だしいものはない。そこには労働能力の優劣以外、經營の仕方の巧拙がある。即ち頭と手とに幾段かの差違がある。で、いくら労働能力に於て優れてゐても、經營の仕方が拙い爲に年中苦しんでゐるものがある。又經營に對して工夫し得る頭を持つてゐても、労働力が乏しかつたり、資力が乏しい爲に、それを充分に伸ばすこともできないでやはり年中貧乏してゐるものもある。これ等の不足がいろ／＼に交錯して、益々農家各戸の經濟をマチマチなものにする。

これを何とかして甘く組み合はして、各々その能力を伸ばし補ふ方法はないものか。  
こゝで又一ト工夫一ト相談。

### 事情のまぢまぢ

百姓仕事はキチン／＼と季節に順應して行かねばならない抜き差しならぬ、油斷の出来ない嚴密な仕事だ。人間の都合次第で伸縮の出来る仕事ではない。一日の後れは永久に取り返しがつかぬ。各々の作業は嚴密に、其「<sup>シーズン</sup>季」に支配される。

しかし乍ら人間の中に生ずる故障は「季」に係らない。いつどんな時にも突發する。馬が死ぬ人が病む、親類に事がある。子供が産れた。そしてその都度ヒマ倒れが生じ、季節はドン／＼過ぎて行く。かうしたツマツキはテキ面に農家各戸の經濟に響いて行く。

たとへ一戸の家に事が起つても、野良仕事には支障なからしむるやうにしたら、どんなに百姓が助かることか。他から手傳ひを受けやうにも、季節は凡ての農家を一樣に忙しくしてゐるからそれも出来ぬ。結局打撃を受くるものはその一家及びその近い親戚丈である。而も季節を逸することは、故障の起つた一家の日日の労働賃銀丈の損失ではない、收穫といふ大きなものに影響するから困る。何とかこの收穫に丈は影響させないやうにする工夫はないものか？

こゝが又一ト相談。

### 共同作業から共同経営へ

一つの村落に於て、めい／＼のカマドには千種萬別の差違があるも、その農業のソブリ、一般の作業に於ては大した相違はないどころか、殆ど全く同じだと言つていい。種子を蒔くから、草を除くから、肥しをするから、取り入れする迄、みんながきまりきつたルーチン（常習慣行）、何のケジメもありはせぬ。そんならイツソコツソ皆んなが共同で作業したらどんなものだらう。

勿論、共同作業といふことはお上でも奨励してゐる。然しそれは田植とか稲刈りとか特に農繁期に限られてゐるやうだが、何も農繁期に限る必要はあるまいぢやないか。春耕でも、除草でも同様に共同作業が出来るわけのものではないか。そして春耕、植付、除草、收穫をみんな共同作業に爲し得るなら、それが取りも直さず農業の共同経営といふものではないのか。

お上で奨励する共同作業を徹底させるには、どうしても、竿頭更に一步を進めて共同経営にまで行かねばならぬことは自明の理ではないかネ。

産業組合の効果だつて、つまりはその各種の仕事をつくるめて、實に共同経営に依つて、易

々と擧げらるゝではないか。

共同體の爲すあらゆる仕事は、自然に乃至は必然に共同となるわけだ。不共同の主體で、一部分を共同にしようたつてそれは六ヶしい注文だ。主體を共同にすることがそれ自身一番捷徑だ。

### 共同経営は共産に非ず

だが、待てヨ、早まつちやいけない。共同経営とは経営を共同にすることであつて、財産そのものを共同にすることは違ふ。財産——それは此場合まア土地と限つて——は各自所有權があつても構はぬ。それには勿論小作料を拂ふ。只その上に經營さるゝ仕事を共同にやつて行くといふのだ。農業てふ一個の企業を、めい／＼の小作人や自作農やの孤立的企業に任して置かないで、もつとビジネスライク（企業的）に、最新式の經營法を採用する爲に、もつと集團的に大規模に、村落なら村落を一つの單位としてやらうといふのだ。

耕地の狭小といふことが、機械を取り入れる上に、先天的に日本の農業の缺陷を爲してゐる。

一切の産業上の革命は、機械の出現に依つて爲し遂げられた。資本主義化の弊は別問題として、産業そのものゝ長足の進歩は全く機械の採用に依ると云つてもいい。

然るに農業文は何時迄経つても産業革命の洗禮を受けない。いつ迄も人間の個々の動物力に頼つてゐる域を脱しない。これが抑も農業の進歩せざる最大の原因に數へていふと思ふ。

### 農人にもヒマが必要

更に最もいけないことは、農業に従事する者に取つて定まつた休み、時間といはず、日といはず、キチン／＼と来る日曜に似た何らの定休日もなく、さうしたものでアテにされるヒマといふものゝトントないことである。このヒマが「ある」と「ない」とは實に文明の岐れ目だ。ヒマのない階級に取つては文明などといふことは全く風馬牛に等しい。

然らば此のヒマをどうして作るか？

それには二つの方法がある。

一は差しづめ機械に依つて勞力を省くことだ。機械といふものは元來人間の勞力を省くといふ

人間を樂にする爲に産れて來たものなんだ。だからその本來の使命は人間の爲にヒマを作るといふ一點に存する。それだのにかの資本家といふヤカラは、人間をアプラス爲に、(餘剰にする)機械を採用して、怪しからんこつた。が、機械發明の動機も必要もそれぢやない。人間を樂にし人間のムダな力役を少くしようとするにあるんだ。それが機械固有の使命な筈だ。

もう一つの方法は、差しづめ共同經營だ。共同經營許りがよく時間制のキリシキのいゝ勞働を爲すことが出来る。月を荷ふて出で、星を戴いて歸ることは決して百姓に取つて賞めた話でも何んでもない。それは必然的に百姓のよくなれない原因を構成してゐるものだ。だらしない勞働の習慣が、セイセイした氣懸りのない休憩を取り去つて了ふ。恰もお宮の屋根を背負せられて棟木の上にキバつてゐる力士のやうに、百姓は年が年中その肩の休まる時がない。これがどんなに進歩への活機を歪め害ひつゝあるか測り知れない。共同經營はこゝのところに持つて來いの要求を充たしてくれる。

農村振興は、何といつても農業そのものゝ振興に俟つ外ない。農業といふ一の企業が引合はな

い間は、どんなにしたつて、之にたづさはる農民のよくなる氣づかひはないんだから、先づ何を措いても農業そのものゝ進歩は先決的に所期せられねばならぬ。

機械の應用は勿論農業進歩の全部ではない。然しそれが採用されないやうな組織の存続する間は、どうしたつて農業の進歩は望まれない。日本のやうに労働賃銀の廉い所では、機械を使つても引合はないと言ふ者もあるが、労働賃銀の廉いといふ事は、どの道喜ぶべき現象でも何でもないし、機械で出来ることを人間の動物力で間に合はして置いていゝなどいふことは人道上からも許されはしない。機械にやらして、それに依つて生じた人間の努力は別に之を使用すべきを考へるのが當然だ。又その爲に人間にヒマが出来たら之れ程喜ばしいことはない。そのヒマが一般の文化を進める上になくてならぬ條件なのだから。これは機械に依つて労働者に失業を來さすことゝは違ふ。資本家の工場に採用する機械のもたらす影響と、村落共同体に採用する機械の齎す影響とは、同一に考へられない理由がここにある。

「ヒマ」がないといふことが、田舎の文化を阻んでゐる根本的原因である。田舎の人達は仕事に追はれ借金に追はれ生活に追はれて、カラダも頭も休むヒマがない。その爲に父も子も孫も同

じ程度の状態を出でない。時たま集合の機會があつても、飲むとか食ふとかの相談は忽ちに成立つが、集つてその智識を、若しくはその經驗を互に語り合つてお互の仕事の上に裨益するなどいふ計畫がない。それはつまり日常始終何かに追はれ通して物を考へるヒマのない所から來てゐる。もう少しユツクリした安心した氣分を與へなければならぬ。もし村落全體が一つの事業團體となり、充分經驗を積んだ指導者の指導に信頼して、人々はたゞ各々の努力を正直に提供することとに依つて生活が営まれ得るならば、百姓の氣分は今よりもつとユツクリし、もつと考へ、工夫する餘裕が生ずるであらう。更に機械を取り入れることに依つて一層さうした餘裕が得られるワケだ。その機械を取り入れるしても、個人々々ではとても資力に於て許さぬのだし、又使用するにも個人々々ではあまりに不經濟だからどうしても共同體が必要になる。

### 耕地の集團的使用

日本の農家の貧乏なのは、耕地の狭小な爲だ、といふて済ましてゐる人達がある。それは政府當局者、大學教授、地方の土豪、などで、いづれも一二度洋行して來てからの御託宣でござる。

成程あの人達の最も多く見て歩く英米佛獨では、どこでも一般的に日本の農家などとは比べに  
らぬ程の広い耕地の上に農業が営まれてゐるだらうが、和蘭や白耳義に往つたら日本よりも遙か  
に小さい耕地で、比較にならぬ程の収益を擧げてゐるのを見らるゝであらう。

のみならず、第一この狭い日本に於て、耕地をさう無暗に廣げらるゝかどうかは、考へる迄も  
ない自明の事實ではないか。

日本の農業に取つて現下に必要なのは耕地を廣くするよりも、耕地の集團的使用である。そし  
て集團的に使用し得れば、耕地を廣げると同一の効果をも求めらるゝのだ。今迄のやうに各自の  
耕地が彼處に一反、此處に五畝、といふ風に犬牙錯綜して散在してゐるのでは、仕事の順序がブ  
で不經濟のみならず、肝腎の機械の使用を絶對的に不可能ならしめてゐるのである。これが農  
業の進歩に取つて先決的な障害である。

例を田に取つて見る。

春先の短い期間に大急ぎでやらねばならぬ耕耘、田も畑もみんな一時にやらねばならぬ。而も

春の耕耘はいくら精密に深度にやつてもやり過ぎるといふことはない。それだのに大急ぎに粗放  
にやられるその憾み。

東北地方のやうに、冬の長いそして春でも兎角雨の多い處では、一日でも多く鋤き返された土  
壤を日光に曝らさなければならぬ。それだのに打ち返されない田面が徒らに龜裂するまゝで、有  
難い陽光を只上ツ面に丈けしか受けない。何といふ天然の恩賚の浪費であらう。あれをトラクタ  
ーか何かで、片ツ端から夜晝かけて（トラクターは電燈の装置で夜でも耕耘ができる）耕耘した  
ら何回でも鋤き返して陽光を充分に地中に吸収させることができる。一番骨の折れる、そして一番  
忙しい仕事が一番雑作なく機械でやれるのに。

田植の共同はとうにやられてゐるから言ふ必要はない。除草だつて共同でやれぬことはない。  
ないどころか共同でやつたら、汗のだら／＼流れる、そのくせチツトモ撈るところの見えない、  
あのものうい單調な仕事だ、どんなに楽しく知らぬ間に撈らせ得るだらう。田の上にそよぐ青嵐  
に交ぜて流るゝ民謡がどんなに大勢の男女の汗を忘れさせる利目があるやうになれるだらう。

水かけ喧嘩を絶やす方法がないものか？ 水は高い方から低い方に順々に流しかけたら何にも論がなくなる筈だ。水は高い方から低い方へ流れるのがその本性なのだもの。高い方から低い方へ流しかけたら、夜、寝ずの番をして、時には鍬を振り上げて闘はねばならぬ必要もない筈だ。それは水の悪いのではない。個人々々が方々に散在して田を作つてゐるものだから、そして高い所も低い所も一度一遍に水をかけやうと思ふものだから争ひが生ずるのだ。堰を所嫌はずにせきとめる。他のとめてあるやつを破る。田圃中を東西南北に駆け廻つて短い夏の夜を喘いで暮らす。我田引水とはよく言ふたものだ。是が人間社會の約言なさうだから恐れ入る。

### 田圃が一の工場

然し考へて見ると智慧のない話す。一村の田圃を一つの大きな工場と心得て、各々がそれへ通勤する職工だと思つたらどうだ。田圃の中に一枚の田でも水が潤れてゐたら、誰彼いはずそれを見附けた最初の人が、即座に手を下して水を引く工夫をするに違ひなからうではないか。そこには水かけの先後遅速を争ふ必要がなくなる。高い方から順々に流しかけて置いたら、誰もついて

ゐなくとも水はおのづからにして田圃全體へゆき渡るに極つてゐる。何にも面倒がないわけだ。面倒は凡て人間の智慧のないところから生ずるのだ。

一村の田圃が一つの大きな工場と見做された時に於ては、我田引水などといふ文句は當然辭書の中から抹殺さるゝであらう。そして我田引水といふ言葉の必要がなくなつた社會を想像して見給へ。

吾々は人間の智慧に失望してはいけない。人間の智慧をよき方向に働かしさへすれば、殺し合ふことよりも助け合ふ方向に働かしさへすれば、暴力——強權——よりも、組織——自治——の方向により多く工夫を凝らせば、まだ——いくらもよりよくなれる活路はあるんだ。

耕地整理といへば、田面を十間に三十間の一反歩に仕切ることになりまづてゐるやうだが、アレは何も一反歩と定める必要はない。廣ければ廣い程耕地が得をし、器械が使はれ、大勢の人が一緒に仕事が出来ると。

共同經營の時に於ては、田面は無際限に廣げることができる。田圃が廣いと作業が捗らないと

言はれたもんだが、ソレヤ一戸一戸の勞働に俟つ時代のこと、共同經營となれば廣きや廣い程有利に働ける。耕耘にしても、水引にしても、除草にしても、刈取りにしても。進んだ機械器具を使用する爲には、此の外に道がない。

### 百姓道具、役畜の節約

百姓だつて分業が行はれ得る。どんな季節にも百人が百人みんな同一の仕事をして居るものではない。畝でやる仕事もあれば鎌でやる仕事もある。又牛馬を使ふべき仕事もある。だから個人々々が何もかも凡ての道具を所持して居ながら、使はないで遊ばして置くものがいくらも出てくる。使ふべき必要のある時に、道具置場に往つていつでも持つて來られるやうにして置いたら、何んでもかでも一から十まで各戸が所持してゐなければならんといふ法はあるまい。道具は使はないで置くからこそ錆び、錆びたものをゴシ／＼磨くから減るんだ。いつも使はれてゐる道具は錆びないし、磨く手間も要らない。

共同經營の際には恐らく道具が半分で済むだらう。誰の道具と銘打つまでもない。道具は之を

使ふ者の道具となれるのだから。

更に進歩した高價な機械を農業に採り容れる道は、その資力から言つても、その使ふべき分野から言つても、共同經營の外にはない。

更に最も有利な點は役畜、牛馬の節約だ。

馬でも牛でも飼養の經費は仲々嵩んできた。冬の長い私の方では遊んでゐ乍ら、乾草、糞フナなど高價なもので養はねばならぬ。馬は人間の半分食ふと言はれてる位だ。その爲か以前は今のやうに各戸に必らず馬が居るといふことはなかつた。東京近在の百姓許り見つけてる者に、吾々の方ちや各戸に馬が居るといふと、そんなに裕福かと言つて目を見張るが、馬をもつてゐることは裕福のしるしでも何んでもないんだ。乾田、馬耕の長年にわたつての獎勵はもう絶對的に馬を必要ない道具として了つてゐるのだ。そのために飼養費の多大なのに苦しみ乍ら、尙且つ馬丈はどんな小前な小作人でも持つてゐる。そして時たまゴロリと死なれるか、若しくは骨軟其他の病氣に罹ると丸でカマドにかゝつたやうにガツクリくづ折れて了はなければならぬ。

而もその馬を最も必要とする時季はまア春耕と取入れ位のもんだ。あとは堆肥を取るために飼

ふかと思ふ位のものだ。堆肥なら馬でなくとも豚でも取れるわけだ。馬は何といつても小前のものに取つては甚しい不経済であり容易ならざる重荷である。

然るに共同経営にすると、ずつと其數は減らせると思ふ。殊に、少し位い價は高くとも優良な能率の上る馬で、且つ馬を使ふことの巧みなものに馬耕を専門にやらしたらどんなに捗ることだらう。

### 個人の身代あせり

個人々々がいくらアセツタからでタカの知れたものだ。人の寝てる間にも働いて見せるやうな氣構へをしたところがタカが知れてゐる。よしんばその爲に一二のシンショウのよくなつたものが出來たにしろ、そんなことで決して村がよくなれるものでもないし、又そんなことは凡ての人々に強請さるべきものでもない。どんなに表面は個人の勤勉一方の効果のやうに見えても、仔細に觀察すると家族全體の健康と勞働能率、家格の有無——交際費の要不要、教育費の要不要、特殊の技能の有無——その他いろ／＼の都合のいゝ條件が備はつてやつとよくなつたので、決して

單なる勤勉一方の結果でないことが分るものなんだが、そんな二二の好例なんかはアテにならない。それよりも全體をよくするといふ合理的な組織化が、めい／＼の頭を絞つて考へなければならぬことなんだ。鹽原多助の話をいくら普及させたところが、それが爲に農村は少しもよりよくなりやしない事實が、充分に之を證明してゐるぢやないか。

のみならず、個人々々がシンショウをアせる心理は、村といふものを渾然たる生活體として發達させる上には大害がある。身代アセリをするやうな奴に限つてコスク、道路普請のやうな共同作業には出來る丈骨を惜しみ、選舉の時は兩派からシコタマ金を取り、共同施設などには一文も出すまいとし、おまけに盗みケさへ往々にあり、朝、人の出ぬ中、夜、人の歸つた後でよく他人の畑に足を入れたがるものである。

大原幽學も、曾つてつくづく慨嘆した、「身代アセリほどアジの悪いものはない、子孫を毒することこれより甚しきはなし」と。

身代アセリの家庭の卑吝と、物質慾と、利己一點張りとは、その子女の上どんな影響を與へるかは言はずして明らかであらう。



## 一つの懸念

農民は生れつき自由といふ氣分を何よりも好む。縛られた、窮屈な感じは最も嫌ふところである。元來天候と土地には、目に見えない鎖でギツシリ縛られてゐるが、たとへ地主と雖も、田圃へ来て一々干渉するのではないから、好きな時に好きな作業をしてもいゝといふ氣分が彼等の大いに香氣に感じてゐる所である。

然るに共同經營になつて、労働時間も定められ、一々指導者なり、支配人なりの指圖を受けなければならぬやうになつたら、或は殊の外窮屈な感じを抱くやうになりやしないかを恐れる。さうした懸念は確かに存在する。

それには労働時間外は絶対に各自の自由に任かせるやうにしたらいゝ、そして宅地内の菜園や鶏舎には、それらの自由な時間を充てゝ一は以て自家用に供し、一は以て小使錢の収入とさして置いたらいゝ。

さうした自由を與へて置きさへすれば、一層定つた労働時間にキチン／＼と遅速なく出勤し、

そして何の心づかひもなく氣樂に働けるだらう。個人企業だと、どうしても二六時中、何かしら心づかひといふものが離れない。めい／＼の一家内のことは別としても、肝腎の農業に對してすら絶えず氣がかりになる。然るに今、仕事の上の責任が、充分信頼の置ける技術家、乃至支配人に任かされるならば、それ丈でどんなに氣安くなれるか知れやしない。そこが又共同經營の見逃すことの出来ない心理的の一得點でもある。

又、誰でも一日出れば一日丈の労働賃銀が得られるとなれば、苟も身體のママな者は、どうしたつて働かず家になんかゴロ／＼して居られまい。地主の家族と雖も、奮つて何かしらの仕事に就きたくなるだらう。働かざる者は食ふべからず、と言はるゝ迄もない、働かざることは必ずしも樂ではない。殊に田舎は於ては隣りから隣り、田畑へ行つて汗水流してる中に、ソロリとしたナリでぶらぶらすることは寧ろ苦痛でなければならぬ。共同經營で大勢が談笑の中に氣持よく働けるならば、引込んで家に居るよりも野良に出て働くことがどれ丈愉快だか知れやしない。そして凡ての人が愉快に働けさへしたら、村が全體としてよりよくならずに居れないわけだ。

産業組合でも、共同作業でも、それらの傾向は抑も何に導くものであるかを考へて見なければならぬ。個人々々が相對峙して、所謂自由競争に任かして置くことは決してお互をよりよくする所以でないことを如實に物語るものではないか。なるほど資本主義は自由競争から産れた。然し乍ら、もはや資本主義の完成が決して共存共榮を持ち來すものでないことが分つた。金の力でも天然資源でも、それ／＼溜るべき所に吹き溜つて、平野もなければ平均もない世の中に、自由競争などは出來得べきものではない。既にスタートに於てハンヂケアップが歴として附いてゐるんだ。かうなれや、もう自由競争なんかの文字に欺かれて徒勞に了るしかない努力に盲進するよりも、もつとよく現在の經濟社會の組立てを洞察して、その心臓にメスを擬すべきだ。組織そのものをいかに組立て直すかが根本的な問題なのである。

根幹を不共同にして置き乍ら、末梢に於て共同を力説しても到底効果は舉らない。根幹さへ組織換へしたら、末梢は自ら之に従ふ外なからう。

農民の生活に取つて農業が實にその根幹である。されば農業の經營を第一に共同にやり得たらその他の農村生活の凡百のことは刃を迎へずして解決し去られるであらう。

### 農村振興の根本的着手

凡ての振興は自治自助から出發しなければほんとうのものでない。政府や政黨に農村振興の空題目を唱へさして置く間は、いつまで経つても農村の振興する氣づかひはない。第一、農村以外から振興に資する何ものか來ると思ふてゐるその心理が最もいけないのだ。原動力は他外には存在しない。農村そのものゝ胎内に振興の活機はウヅウヅしてゐる。そいつにハツキリと目を覺まさなければならぬ。

農村が斷乎として、その固有の自治自助に立たうとする時に、先づ最初に爲されなければならぬことは何であるか？それは何よりも先づ農業そのものゝ村落全體としての振興である。そして農業の村落全體としての引上げは、資力、腦力、勞力のマチ／＼な從來の組織のまゝでは望まれない。それはどうしても共同經營の外にないことは、技術的、經濟的に充分理由を有つてゐる。

そして村落生活の生命ともいふべき農業が共同に經營され得たら、そこから派生する一切の社會問題は自づから共同的に施設せらるゝ外なからう。

## 人間を冷血化する機關の話

水い間の懸案であつた新水路の掘鑿も出來て、農園の厄、水害も防げる見込が附いたので、一切を賭けて掉尾の仕事にいそしまうと思ひ決した。新たに果樹の苗を注文し、残つた梨樹には棚を新しく架けて、荒れ果てた畑の復興に取りかゝつた。

棚も、竹や古枕の間に合はせでなく、鐵線で半永久的の施設をしようと思つて、市内の金物屋へ行つて値段を聞いたら、前に或る經驗家から聞いた値段よりも餘りに違ふので、手数はかゝることだが萬事經驗家に頼んで、向ふから東京の間屋に注文を發して貰ふことにした。

東京から送荷の通知が來た。然しいくら待つても、甲片即ち送狀が來ない。それが無ければたとへ荷が驛に着いても受取ることができないのださうな。で、世話をしてくれた注文主に電報をかけて、直ぐ甲片を送つてくれるやうにたのんだ。折返し來た電報は、甲片は既に送つたとい

ふのだ。兎に角、驛へかけ合ふべく出掛けた。

「鐵線は四日前に着いてゐる。いつまでも取りに來ないから通知狀を發しやうにも、名前がこの界限に聞いたこともない名だし、困つてゐた。甲片を持つて來たか。」

「甲片はまだ届かぬから保證書とかで渡して貰ひたい。」

「それはいけない。名前が違ふから。是非甲片を持つて來なければ渡されない。二日以上留置くと保管料がかかるから早くしてくれ。」

荷が驛に届いてゐ乍ら、本人が直きに代金を持つて出頭して居乍ら、一寸した手続きの違ひで見す／＼保管料のかかるものを受取ることができないとは？

習日漸く送狀が届いた。見れば封筒の上に北秋田郡扇田局のスタンプがハッキリと捺されてゐる。正しく郵便の誤配で手間取つたことが分つた。

二三日來、夕チの悪い風邪で頭のチキ／＼痛むのを、憤滿の情に驅られて市の郵便局長に直談に出かけた。

局長は明らかに誤配を認めた。けれ共それは秋田局の責任ではない。その上賠償の規定はない

から保管料の損害は出すことができないといふ。強ひてそれを追窮しようとすれば逓信大臣を相手取る外ないが、訴訟費用が引合ふか知ら、などと軽く受け流してゐる。ケロリとしたものだ。再び、驛に引返した。

「事情は能く分つてゐるが、鐵道では鐵道の規定通り保管料を徴収する外ありません。いつかも大曲でこんなやうなことがありました。氣の毒だからといふんで助役が保管料をまけてやりましたら、忽ち車掌に落とされ、とう／＼此度の整理で首になりましたからなア？」

規則にさへ觸れなかつたら、國民の一人々々がいかに損害を受けやうが構はないといふ心理、是れが當今の官公吏の通有性である。國家とか社會とか所謂法人の使用人となつてゐる者には、兎角ヒュメーン(人間味)が乏しくなる。情に依つて事を處理するといふことを最も嫌ふ。そのクセ轆等の一味のもの、官吏同志、會社員同士だと「どうにかしましょう」で規則を度外視してあらゆる情實と資縁を恣にしてゐる。

どうしてこう日本の役人氣質といふものに、常識の働く餘地がないのであらう。荷受けをしな  
いのは鐵道に乗つてゐる郵便係の驛りだそうだが、荷を驛に置いたところが、どうせ田舎の小驛

のことで、そう貨物が輻湊してゐるわけぢやなし、損害を蒙つたといふ何等の事實がない。それは個人が現ナマの料金を空な規定の上に拂はせらるゝ損害に比ぶべくもない。這間に働かなければならぬのは人間を第一義とする心掛だ。人間としての常識だ。徒らに規定にのみ拘泥して實際の損害を生ける人間に與ふることを願みないのは、國家や法人の名にかくれた人間味のない殘虐である。

法人なるものは、法の上に人格があるそうだが、それはどんなにしたつて生命があるのではない。無生物だ。無生物どころか單なる名前に過ぎない。それにたづさはる人間次第でどうにでもなるものだ。然るに人間は兎角責任をば無生物の法人に轉嫁して、切れば血の出る個々の人間をその無生物の犠牲と虐待に委して願みない。どんなに小さくとも全責任を負つてやつてゐる個人の仕事を持つものと、尨大な、どこに責任の所在があるんだか分らぬやうな機關に寄食するものとは、斯うして處世上の心理にも、人間同士の觸れ合ふ肌合にも、格段の違いあることは争はれない。それは血と水ほどの違ひだ。

階級の鐵鎖に縛られて、大きな咳拂ひさへ憚られるやうな中に育つて來ると、どうしても一種

別な心理を馴致せずには居ないのであらう。最もいけないことは一人々々の人間のほんたうのネウチといふものを見ることの出來ない點だ。肩書と月給の高を外にして人を測るメヤスがなない。一家を擧げて長官に臣従することさへ辭さない。否、むしろそれが當然の道德だと心得てゐる。廣い世界になんといふ狭い世渡りであらう。

どうせ好きでたづさはつてゐる仕事ぢやないから、出來る丈面倒の起らぬやう「事勿れ主義」を奉ずるのも止むを得ない。どんなにしたつて不備を免れない規則を唯一の基準として、その外に一步も踏み出さまいとする。面倒を厭はず手鹽にかけて世話を焼くといふ氣などは毛頭起らぬ何事もその場限り、その土地に駐る間丈のこと、兎に角怪我なく年數が経てばいゝといふ心理。

無意義なる年數よ、そして人間を去勢する恩給制度よ！

只の労働者が一生血と汗を絞られ乍ら、國家繁榮の生産業にたづさはつてゐるのには一文の恩給もなきに、單に机に坐つて事務を取る刀筆の吏が、年數のたつにつれて鰻上りに月給の上る外に、更に恩給まで備へらるゝとは、同じく國民の一員として國家の爲に働いてゐるものなるに不公平な待遇ではないか。

恩給制度は必然に自然淘汰を妨げ、新陳代謝を阻み、國民の一人一人を眞劍ならしめない。畢竟するにこれは國家の行政機關にたづさはるものゝお手盛りの手前味噌の制度である。そしてそれがどれ丈國家の進運を阻止してゐるか測り知れないのである。

生産者をこそ國家ははぐまなければならぬ。行政機關は何と言つても生産者に依つて飼はれてゐるにしか過ぎぬ。生産者はいくら増しても、結局國家にも社會にも得益だが、行政機關などは最少の必要に限度すべきものだ。然るに生産者が、恰も行政機關に従屬してゐるやうな地位にあるとは不思議な現象ではないか。本末の顛倒、主客の顛倒とはこれ此の事ではないのか。近頃八ケましい國費膨張でも因果は觀面に現はれてゐる。國費を食ふものは誰か？そして國費を産み出すものは誰か？

右の手より奪つて、左の手に與へられても、何の有難さも感じまい。よし奪ふものと、與ふるものが、別の建物に入つた別の人間であつても。

— 完 —

大正十五年十月廿五日印刷  
大正十五年十月卅一日發行

定價貳圓

版 者 堀 井 梁 步  
發 行 者 下 中 綠  
東 京 市 神 田 區 錦 町 三 三  
印 刷 者 志 賀 主 殿  
東 京 市 神 田 區 三 河 町 三 六  
會 社 式 有 所 權 版  
株 式 有 所 權 版  
平 凡 社

東 京 市 神 田 區 錦 町 三 三  
振 替 東 京 二 九 六 三 九 番  
電 神 話 田 二 〇 四 七 番

大取次

東京 東京堂 北隆館 栗田書店 文行社 東海堂  
文盛堂 文林堂 大阪 御原書店 名古屋 川瀬書店  
星野書店 九州 菊竹書店 大坪書店

終